

『却餘詩存』は前詩までで詩文の掲載が終了しています。三浦野方先生輯『却餘詩存掃帚録』のみ掲載しますが、一部『書海』の「滄海遺珠」（土屋竹雨先生選）・『芳翠墨華帖』等に掲載されている詩は補填いたしました。また原文は旧仮名遣いのため現代仮名遣いに直しました。

江戸川舟游

酒を載せ波に随う一葉の舟。

行く行く網罟を投じて中流を下る。

銀鱗躍るところ驟涼動き。

白雨斜に過ぐ蘆荻洲。

（尤韻 舟、流、洲）

酒を携えて小舟に乗り、投網を打たせながら江戸川を下る。鮎（はぜ）であろうか、ピチピチするのを、天ぷらか何かにして……と、夕立だ！ 簾（とまり）よしずのおおいの下で、芦荻（ろてき）あしと、おぎ）を打つ夕立の雨脚が琵琶に聴えたら、是れ琵琶行。

燈渚の曾遊幾年をか隔つ。

鴈を飛ばして復た泛ぶ白鷗の前。

漁翁七十、魚介をひさぐ。

酔うて瓜皮（クワヒ）・小舟のことを繋いで変遷を談る。

（先韻 年、前、遷）

このけむりのこめたなぎさで幾年か前に舟遊びをしたことがあったが、今また、同じように群れ飛ぶ鷗を眺めては盃を重ねて居る。当年の船頭、今年は早七十になり魚や貝を売って暮しているとのこと、不思議な邂逅にまあ一杯やれと飲ました少しの酒に酔って、乗って来た小舟を靄（もや）って、世の変遷を談る。

「旦那、昔はよかったがね……。」

辛卯九月觀劇頌歌右衛門丈時姫演技

丰姿明麗、世に倫無し。

機微を写し出して情最も真。

巧みに時姫に扮す歌右の伎。

伝家の至芸、古を新と爲す。

（眞韻 倫、眞、新）

姿が世に比類なく美しい。鎌倉三代記の時姫となった演技が真に迫り、つい、情に惹き入れられてしまう。伝統の古いお家芸とはいいいながら工夫を凝らして常に新らしく見せる伎芸を偉とすると。同じ芝居を見ても酒を飲んでからだとか妙味が判らない。況んや名人の眼を以て名伎を観る、凡眼で見るとは鑑賞の度が違う。されば竹雨先生も評して、「古を新となす、まことに是芸術の要旨なり、奉じて以て圭臬（法則）となすべき也」とおっしゃった。

次鳴雪君遊寸又峽詩韻

君は溪峽を探つて青州(美酒)を酌み。

我は平原(悪酒又は顔真卿)を撫して残燭幽なり。

同じく機心をしりぞけて塵事遠し。

錦楓、屋漏新秋に傲る。

(尤韻 州、幽、秋)

この詩を鑑賞するには予備知識が要る。即ち世説、術解に、「晋の桓公に主簿(書記)有り、善く酒をわか
つ、酒有ればすなわち先ずなめしむ。好き者は青州従事といい、悪しきものは平原督郵という。蓋し青州に
斉郡あり、平原に革県あり、従事なるものは臍下に到るをいい、督郵なるものは臍上に在つて住まるを言う。」
と、つまり、美酒は臍(へそ)の下に下り、悪酒は臍(むね)の上に滞るのである。斉はヘソなり、革は臍(むね)
と音が通じる。結局、青州は美酒で、平原は悪酒の異名である。シャレもこれ位手が込んできるとキキ酒よ
りむづかしくなる。

さて、君は溪谷に美しい紅葉を見ながら美酒をくんで居られるが、我はうす暗い灯火をかき立てて悪酒と
同じ名の平原の太守顔真卿の書を臨撫している。相共に利口に立ち廻らないことは同じで、そちらは、紅葉
の錦におごり、こちらは屋漏痕の妙趣に打たれてお互に楽しんでいるという秋興。詩の鑑賞もまた難き哉。
されば竹雨先生も「錦楓屋漏、成句を拈り来つて、うたた奇拗なるを覚ゆ、強腕と云うべし」と評された。

第二回同文展。會期終了之日。將撤展觀諸作。偶一女性

倉皇而來入場。竹堂勵聲制之。既而知其爲珠苑女史。慙

懃招之。情趣可掬。戲裁一詩。

期尽きて何人か来て場に入る。

朱明の室忽ち涼を生ず。

無言笑を含む瀧珠苑。

挙手之をさしまねく高竹堂。

(陽韻 場、涼、堂)

同文会展最終日の閉場時刻に、一人の女性がアタフタ駆けこんできた。竹堂先生励声一番「駄目々々」と
手を横に振つてこれを制したが美人はノンコノシヤア、ハテ、メンヨウナと眸を凝らす竹堂先生へにつこり
笑いかけたのは瀧田珠苑女史。竹堂先生、改めて手を大きく縦に振つて招じ入れる。そのほほえましい情景
に、焼けつくような夏の会場は一味の涼氣がただよう。それにしても瀧珠苑高竹堂の対句、よくも平仄が合
ったもの。

次毅齋詩伯見寄韻

少年曾つて夢む墨林の雄。

偶ま滄桑に遇いて道通じ叵し。

剩し得たり白頭の窮措大。

今時独り守る古時の風。

（東韻 雄、通、風）

若い時は、書壇一方の雄を夢見ていたが、敗戦の災禍で、滄海と桑田が入れ変わる様な破目に遇って、事志と違い、残ったのは只白髪頭の貧書生。そして今頃流行らぬ古めかしい道を独り黙々と守っているという謙辞。

大劫回看すれば意悚然。

如今樗散甄全を恥づ。

翰林願わくは良師友を得て。

静を修め閑を愉んで萬縁を了せん。

（先韻 然、全、縁）

敗戦の惨禍を回顧するとゾツとする。そして今は樗櫟の散木が瓦の全きが如く生き残ったことが恥づかしい。この上は只々翰墨場に於て良き師友を得て心を落ちつけ、身を修め閑をたのしんで五百重千重の累なる縁を了りたい願いのみである。と

この二首について竹雨先生は、両家の応酬意の命ずる所筆能く之に随う、而して各身分懷抱あり人をして一読頤を解かしむ。と評された。そこで穀斎詩伯の原韻を尋ねて見た。

書社賢兼詩社雄。正鋒檢韻趣相通。茅中枕籍東華誌。學得高人巨匠風。

高作讀來心豁然。詩書始悟有兩全。芳翁師父吾門子。欲結東西翰墨縁。

追悼仁賀保香城先生

仙姿鶴の如く松心を抱き。

清麗の詞章翰林を賁る。

禹域同遊人已に半ばす。

遺篇歳々香を焚いて賸す。

（侵頼心、林、唯）

鶴のように瘦せ形の節操豊かな仙人の姿であられた。清麗な詩文で文壇をかざって居られた。曾て御一しよに中国にも遊んだ、同行、最早やその半を亡ったが、先生もまた亡き数に入られた。祥月命日には遺篇の数々を斎つて、焼香を捧げ讃誦したいと。詩壇の巨人を悼まれた哀惜の篇。

偶 拈

柴門畫靜雀堪羅

柴門画静かにして雀、羅するに堪えたり。

閑寫黃庭不換鵞

閑に黃庭を寫して鵞に換えず。

老去難醫金石癖

老い去つて医し難し金石の癖。

臨池一笑會心多

臨池一笑、會心多し。

（歌韻 羅、鵞、多）

偶拈（ぐうねん）〓思いがけなくできた詩であろうか、門前市を成すの反語に、門前雀羅を張るとあるが、その言葉通りの我が門。閑にまかせて黃庭經を臨寫したが、さて羲之の様に鵞に換えるでもない。ただ年を取つて古帖や拓本等を友とする金石の癖は最早医し難いものとなり、習字をして居るとにつこり独り笑むように心にピツタリした作が出来ることも多いといわれる。羨ましい閑靜の心境。

璞社詩筵席上分韻得豪

窮陰塵事逃れ難きをいかん。

筆硯また徒らに客の為めに勞す。

今日来たり参ず閑靜の室。

炉辺句を案じて松涛を聴く。

（豪韻 逃、勞、濤）

年の瀬というと、やむを得ない用もある。客のために致し方ない揮毫もせねばならん。併し今日幸い恩師竹雨先生の詩会に参じ得て松風の音を聴きながら詩を考えることができた。筆者ここを記しつつ苦茗一杯。

辛卯除夕

玉兔金鳥夢を駆つて過ぐ。

今宵又作す歳除の歌。

劫余の詩卷清写するにものうし。

漂泊の書人感なんぞ多き。

（麻韻 過、歌、多）

色々の夢想を繰返えしつつ月日は過ぎて今宵また大晦日の詩を作ることになった。終戦後の詩の数々気になりながら清書するのもおつくうだ。書に打ち込む世捨人もさすらいの身となつては何と感慨の多いことかと仰せらるる。このあたりの作、まことに靜寂である。

過靜陵謝諸公款待

孤負多年東海山

孤負多年東海の山。

今朝來謁好孱顏

今朝来り謁す好孱顏。

静陵知己盡文雅

静陵の知己ことごとく文雅。

也似白雲過故関

また似たり白雲の故関を過ぐるに。

（刪韻 山、顔、關）

この何年か東海の名山富士にそむいて来たが今朝やつと来て好ましい山の姿に遇うことができた。駿河の知己のみなさんは文雅な好人達ばかりなので何のこだわりもなく、恰かも通いなれた旧関を通過する白雲のように快適である。

償書債

君揮毫をもとむ、猶記するや不（いなや）。

未だ宿約を償わず、幾たびか秋を経たる。

塗鴉、今日牛歩を慚づ。

穉拙依然、人白頭。

（尤韻 不、秋、頭）

もう幾年になるだろうなあ、君は或は忘れたかも知れんが、僕は頼まれた揮毫を果さないのが気になって居た。まことに遅くなったが今日書いた。白髪頭になっても相変わらず穉拙な作で恥かしいが……。

拙書爲文部省所購入近代美術館

吾が書、選を蒙って文府に入る。

鳥跡蝸涎化工に懸づ。

何れの日か雲煙供養足り。

天門龍躍って長虹を掃わん。

（東韻 工、虹）

吾が書が選ばれて文部省に購入されたが、鳥の足跡やかたつむりの作った天然の描出に及ばないことを恥ずかしく思う。何時になったら筆研の習練を積んで、書道の奥義を極め、九つの天門悉く通過した龍がよ躍って空高い虹を凌ぐ様な書が出来ることであらうと。選に当たった作は日展出品の『簪枝園柳低衣桁。一片山花落筆牀』の隸書封聯であった。

壬辰新年 昭和二十七年

一硯磨來六十春 一硯磨し来る六十春。

元朝筆把自清真 元朝筆を把れば自ら清真。

誰將古法爲陳套 誰か古法をもつて陳套と為す。

富嶽當天與歲新

富嶽天に當つて年とともに新たなり。

（眞韻 春、眞、新）

筆硯に親しんで六十の春を迎えた。いつもながらめでたい元日の朝筆を把れば心も筆も自ら清真を覚える。さて古法を一概に古いなどとけなすまい。靈峰富士を見よ。何万年たつても年と共に新しいではないか。「元朝の見るものにせん富士の山」

壬辰一月與畊硯會諸子遊強羅

遠く白雲を訪ねて寿觴を称ぐ。

緑風荘裡、墨香を翻えす。

石谿の残雪、寒林の月。

すべて吟懷に入つて俗腸を淨す。

（陽韻 觴、香、腸）

箱根路の白雲を慕つてはるばる祝杯を挙げるこゝ強羅の緑風荘、室内は墨の香で一パイになった。見渡せば石谷に消え残る雪、枯木林にかかる月、一として詩情をそそらぬものはない。身心共に、六根清淨の思い、曰く、山中の宰相。

諸公が健筆は一、千に当たる。

韵を分ち詩を作る誰か後先。

罰酒さもあらばあれ金石の数。

兄と為り弟と為るも亦奇縁。

（先韻 千、先、縁）

諸公の健筆は何れも一筆当千であるが、さて作詩となるとどういう順か、それは罰杯の数で定まることだが何れにもせよ、兄となり弟となるのだから亦奇縁というべしじや。

晨起湯に坐すれば神快なるかな。

彩雲忽ち旭光を捧げて回る。

天辺描き出だす大文字。

山雪消殘奇影開く。

（灰韻 哉、回、開）

早起きして一人湯にひたる位いい心持はない。やがて東の空に彩雲が起ったかと思うと忽ち旭光がさし初めて天空に大文字があらわれた。これは京都名物の大文字にならつて山をきり開いたその山ひだに消え残つた雪が描き出した大字の奇景であつた。

與翠石峰月兩兄醺于峰月堂席上率賦

少時ともに払う硯池の塵。

翰墨の縁は長し廉潔の人。
今日相逢うて隔意無し。
白頭鼎坐青春を話す。

（眞韻 塵、人、春）

即興詩―若い時から仲よく筆硯に親しんだ仲、何という翰因墨縁であろう。清くさっぱりしたお互の人柄は白髪の新だに、打ち解けて話すこと話すこと。三人鼎坐して語り合えば顔も心も若い昔に返えることである。確かに小供の時から友に逢うことは長寿法の尤（ゆう）たるものである。

板倉新川君見恵温室蔬菜

屏障風を遮って火炉を囲む。
時ならぬ珍菜寒厨に落つ。
満盤の野趣雪窓の底。
展ぶるに似たり南宗一幅の図。

（眞韻 爐、厨、圖）

寒風を防いで火鉢で暖を取っているというのに春の緑、初夏の紅。台所を受持たれる夫人の笑顔、盛り上げた皿にあふれる野趣、外は雪である。膳の上は一幅の南画、或は実篤の絵であつたかも知れない。

寄祥堂君道謝

駕を命じて遠きを辞せず、
慇懃我が門を敲く。
会心名画幀。
恰眼碧蕉根。
丘堅虚壁に生じ。
雲箋小園に展ぶ。
君が情誼の厚さに感じ。
卒尔蕪言を献ず。

（元韻 門、根、園、言）

はるばる遠い処から車を駆って、わざわざの訪問、会心の名画幅、眼をよろこばせる芭蕉の苗、虚しき壁には丘壑が現われ、小園にはやがて雲箋が展べられるであろう。や、有り難う有り難う。つまらん詩ですが急いで謝意を表します。祥堂氏は画、写真にも長ず。その審美眼に選ばれたる名画、想うべし。

服部砂洲君見贈蓮根糖糠菓

遠来の珍菓吟魂を慰む。
想い得たり香風の藕園を度るを。
独り怪しむ愛蓮の周茂叔。
唯花葉を称して根を言わず。

（元韻 魂、園、言）

詩情を豊かに載せて遠くから珍らしい蓮根のお菓子 の 贈り物。初夏のあの蓮田の香風ただよう様である。さて蓬について連想されるのは愛蓮説、おかしいことに、その作者たる周茂叔、花や葉は口をきわめてほめているが蓮根のことに一言も及んでいないのはどうしたものであらう。

第一回書海社展所感

胸懷托得筆頭花

胸懷托し得たり筆頭の花。

俊侶聯牀墨水涯

俊侶牀を聯ぬ墨水の涯。

點畫不論工與拙

点画論せず工と拙と。

天真流露思邪無

天真流露思ひ邪無し。

（麻韻 花、涯、邪）

筆端にほとばしる花、諸君の精魂を託された出品、連らなつて墨田河畔松屋の会場、一点、一画、うまいまづいは論外だ。真の己の現われこそ貴いのだ、若し孔子様が御覧になられたら書三百、一言以て之を蔽えば曰く思無邪と言われるであらう。

偶 成

絶無風韻盪心魂

絶えて風韻の心魂を盪かすこと無ければ。

立異銜新何足論

異を立て新を銜うとも何ぞ論ずるに足らん。

阿世投時一宵夢

世におもねり時に投ずるは一宵の夢。

超然千古藝初尊

超然千古芸初めて尊し。

（元韻 魂、論、尊）

千古に超然として芸初めて尊しと。此の言をなし得る人他にありや。

竹雨先生評して曰く「心に感ずる所慨乎として之を言う。筆々凱切能く時弊にあたれり。超然千古芸初尊。名言不磨なり」と。

遊松島

雨、前遊をはばんで茲に五年。
重来始めて泛ぶ米家の船。

潮空一碧、秋画の如く。

巨筆題せんと欲す松島の天。

（先韻 年、船、天）

五年前には雨のために島巡りができなかったが、今度はかの米元章が書画を一船に積み込んで遊んだといういわゆる米家の船に次ぐ書人画人同乗の船を乗り出して存分な遊覧、海も空も碧一色の画、広々とした紺碧の空に題賛を加えたい衝動に駆られた。

蓬海壺天、瑞色多し。

瑠璃盤上青螺（せいら）を散ず。

巖頭の松樹千年の後。

記するや否や吾沿曹筆を載せて週ぐるを。

（歌韻 多、螺、過）

蓬莱島のようにめでたい景色。碧瑠璃の大盤上に大小様々の青螺（あおにし）を散らしたという形容そのままだ。巖上に生える若松よ、千年の後もお今日われら墨客の来たことを覚えていておくれか否か。

仙台客中得病蒙吉川國手之仁惠賦此道謝

羈窓病に臥して扁倉を拝す。

文字筵中藥囊を探る。

研海征年雪月を同じゅうす。

風懷引き得て墨縁長し。

（陽韻 倉、囊、長）

旅の宿りに病にふして扁倉―扁鵲と倉公と共に名医の御診察をいただいた。丁度揮毫の催しに参会されておいでなのでたちどころに間に合った。しかもその扁倉吉川國手は以前舎弟研海と月を諷い雪を咏み合った俳句仲間であられるそう、風流、雅懷、翰墨のえにしの糸はどこまでつながるものやら。心細い旅先で定めて心強かったろうと筆者も胸をなでおろした。

壬辰十一月奉祝立太子並御成年式典

霽日金風黄菊の秋。

皇儲慶有り、兆民謳う。

大劫を経来って何物をか贏つ。

永く護らん和平と自由と。

（尤韻 秋、謳、由）

日は晴れ渡り、爽やかな秋の風が黄菊の香をただよわせているめでたい日に立太子のおよろこび、国民一斉に奉祝を捧げ奉る。大戦の苦難によってわづかに勝ち取った和平と自由。願わくはこの皇太子殿下の御もとに永久に護り徹したいものである。

遊來宮芝生莊

諸公相伴なつて寒山に上り。

我をして泉石の間に逍遙せしむ。

最も是れ人生の快心事。

酒醒め棋罷んで尚閑を余す。

（脚韻 山、間、閑）

樗師の寒山逍遙遊、悠々自適。

輓井上秋濤

流離多歳、雲関を隔つ。

嘉績長く留む文墨の閥。

惆悵何ぞ大外を望むに堪えん。

客星一夜邱山に墮つ。

（刪韻 関、間、山）

大劫の後は師弟離れ離れとなつて所定めずのこ雲関を隔てさまようこと多年。君の遺した嘉作良績は長く、墨人の間に残るであらう。ああ、一夜の内に幽明境を異にした茶毘の煙の立つあたり、望むに忍びない。師弟の情正に断腸。

璞社潑散會席上分韻得先

塗鴉自在一、千に当たれども。

韻を弄すれば才疎にして常に先を譲る。

酒数いかなぞ金谷の罰。

杯兄詩弟亦因縁。

（先韻 千、先、縁）

筆を執つてはお家芸故一人で千人の對手もするが、詩を作る方はどうも苦手で罰杯ばかり。ままよ杯兄、詩弟も亦翰墨の因縁か。分韻では先を得、弄韻では先を譲る、措置の妙。

壬辰除夕

酒に当たつて又成す除夕の歌。

百年功業半ば蹉蛇たり。

昨、郷友に逢つて容（かたち）の改まるに驚く。

華甲明朝我をいかん。

（歌韻 歌、蛇、何）

酒杯に向つて又年送りの詩を作ることになったが、ふりかえつて見ると生涯の計画も半分はつまづいていようだ。昨日は郷里の友人に逢つてその老いふけたのに驚ろいたのであったが、我も明日の元旦には、還

暦、どの様にふけこむことであらう。

華甲―数え年六十一才をいう。華の字をよく見ると十字が六個と一の字が一個、その故に華甲と書いて六十一才とし、還暦という代りに使用する。

癸巳新年 昭和二十八年

東風先拂研池塵 東風先ず払う研池の塵。

華甲迎來癸巳春 華甲迎え来る癸巳の春。

朝舉椒觴遠相壽 朝に椒觴を挙げて遠く相寿ぐ。

好鶯佳友五千人 好鶯の佳友五千人。

（眞韻 塵、春、人）

こち風が先づ硯の塵を吹き払う。みづのとみ年の還暦の春。このめでたい元旦に屠蘇の盃を挙げて、まづ筆硯に親しむ全国津々浦々の佳皮―書海杜友五千人―へ、おめでとうと新年のことほぎを言いかわすのは何よりも嬉しい。

華甲自述

紅顏志學待春秋 紅顏学に志して春秋をたのみ。

華甲無爲徒白頭 華甲無為にして徒らに白頭。

只有隨身一枝筆 只有り隨身一枝の筆。

百年天地俛優游 百年天地俛(ほしいまま)に優游。

（尤韻 秋、頭、游）

紅顏の頃若さを誇り学に志したが、還暦の今日回顧すれば何等しでかした事もなく徒らに白髪の実のみ、只身についた一本の筆ありて、悠々生涯を托し得るのは幸である。

竹雨先生曰く「書、以て命と爲し、酒、以て伴と爲し、塵累を解脱して天地に優游す。心術身分の高き、人をして欽仰せしむ」と。

筆者当時敬頌華甲の歌をこの詩に和して奉った。紅顏志學待春秋。一点一画学ぶところをこめられし文字の数の限り知らずも。華甲無爲徒白頭。龍爪の白き和毛のにこやかに翁さびたもう文字のひじり。只有隨身一枝筆。一えだの筆のまにまに千万(ちよろずの)人の心をすべたまいたり。百年天地俛優游。天地(あめつち)のももたびちたびめぐるとも書の極則と仰がるるみて。茲に再記、自ら感激を新たにした。

題還曆壽像

眉上の皺波苦辛を畳み。
老顔彷彿、双親を憶う。
門生寿を頌して胸像をおくる。
六十初めて知る我が貌の真。

(眞韻 辛、親、眞)

額の皺(しわ)は辛苦の跡。老いたる顔は母にも似、父にも似て居る。この門下生の諸君が長生きをたたえて贈って下さった胸像によつて我が顔の真相を還暦のこの年にして初めて知ることが出来たとの感慨。この寿像は書海杜事務所に現在安置されてある。

鶴岡秀堂君見贈梅樹有詩次韻以謝

野梅移し得て書帷に映す。
復た花信の遅きを咲ざるを用いず。
想う昨、寒山、月生ずるの夕べ。
石谿の冰雪と清奇を闘わせしを。

(支韻 帷、遅、奇)

御恵送の野梅が今は樗園に植わつて書齋に光を投じている。この梅があるからには今後花期の知らせが遅着してもくやむことはいらぬ。この花を見るにつけても昨日まで寒い処に生えていて山に月が出たならば、谿の岩間に消え残る雪や冰と清さうつくしさを相競うたことであつたろうと想われると。この梅は多分樗門の裏にあつて見上ぐる大きさのあの見ごとな梅であろう。花期が一般より遅いので、春光暖い時、満開となる。庚子春芸術院賞御受賞のニュース一を聞いて樗盒に駆けつけたとき丁度満開で、お祝いの言葉もそこに師とこの花を賞したことであつた。

四月麥酒

米俗欧風九街に満つ。
桜雲何れの処にか春鞋を著けん。
巨觥傾けつくす麦新酒。
一気散じ来る胸の鬱懷。

(灰韻 街、鞋、懷)

これはビール会社からの依頼で、麦酒十二か月を詠じた一つで、先生の分担が四月に当たったもの。巨觥は大きなサカヅキ。

この頂、復興建築も、街行く人の身なりも大分立派になったが、それがすべて欧米好みで、せつかく桜が咲いても、昔ながらの花見姿では戸惑いそうだ。ママよいつそのこと、大ジョッキで生ビール。杜牧の「觥船一棹百分(百パーセント)空し」と行こう。ウィーツ、ああいい心持だ。

弔悼加藤松香女史次翠石翁詩韻

書苑曾て知る佳麗の人。

墨華発する処、杯を把つて親しむ。

劫余空しく逐う往時の夢。

風、松軒を過ぎて零露新たなり。

（眞韻 人、親、新）

かつては墨場一点の紅として、書余御酒も召された才媛、終戦後は噂さを聞くだけであつたが遂に北邸の土還られたかと、軒端に起る松籟に、降る露のほのかに含む松の香に女史をしのばるる多感の詩人。

次韻以賀秀堂舉男兒

君家慶有り歳茲に新。

門外弧を懸く癸巳の春。

六十の樗翁亦周甲。

貞松仙鶴共に精神。

（眞韻 新、春、神）

門松と共に桑の弓をかけて男子出生を喜ぶ鶴岡家、鶴寿千年を師家に献ずれば、還暦の松本先生稚松の千代を弟子の家にことほぐ、師弟両家御慶の春。

祥堂贈盆松有詩次韻以謝

盆中老翠を交う。

龍影窓に映じて清し。

忽ち念う静陵の客。

雲煙筆に随つて生ず。

（庚韻 清、生）

盆栽といえど千歳の翠をほこり、龍鱗の老幹をわだかまらず、その好き枝ぶりを見て忽ち思ふのは贈り主祥堂子のこと。毫を揮つて紙に落せば雲煙の如く、書画共に佳ならざるなきその健腕ぶりである。

函山八仙歌〔壯年所作〕

癸酉十一月與辻本史邑長谷川流石佐分移山川村驥山吉田包竹高塚竹

堂柳田泰雲諸友游函嶺會環翠樓山楓染霜秋色可賞酒間乘興戲作八仙歌

勝驪山中秋正闌

勝驪山中秋正に闌なり。

茲會友朋欣交驩

茲に友朋と会して欣んで交驩す。

靈泉洗盡胸芥蒂

靈泉洗い尽くす胸の芥蒂。

把酒早已游僊壇

酒を把って早く已に仙壇に遊ぶ。

竹堂三杯陶然樂

竹堂三杯陶然として楽しむ。

宴半避盃憑欄干

宴半ばにして盃を避けて欄干に憑る。

低吟且賞前山景

低吟且つ賞す前山の景。

醉顏堪比楓葉丹

醉顏比するに堪えたり楓葉のあかきに。

流石五斗泰然坐

流石五斗泰然として坐す。

飲如長鯨盃翻瀾

飲むこと長鯨の如く盃に瀾(なみ)を翻えす。

性來太愛投球戲

性来はなはだ愛す投球の戲。

興旺忽思鳳夢鸞

興旺(さかん)にして忽ち思ふ鳳夢鸞(ホームラン)。

史邑欲歌無絃管

史邑歌わんと欲すれども絃管無し。

仰天頻發脾肉歎

天を仰いで頻りに発す脾肉の歎。

豈啻一座免灾厄

豈に一座の災厄を免れしのみならんや。

鄰糠味噌亦平安

隣りの糠味噌も亦平安。

驥山高談雜諧謔

驥山高談、諧謔を雜(まじ)ゆ。

脣頭飛沫如奔湍

脣頭の飛沫は奔湍の如し。

醉餘揮筆作狂草

酔余筆を揮って狂草を作る。

字勢與人同蹣跚

字勢人と同じく蹣跚。

移山獨傾炭酸水

移山独り傾く炭酸水。

默坐含笑心自寬

默坐笑を含んで心自ら寛なり。

芳翠睡覺猶恍惚

芳翠睡覺めて猶恍惚。

坐湯繼夢日三竿

湯に坐して夢を継ぐ日三竿。

苞竹泰雲争烏鷺

苞竹泰雲烏鷺を争う。

丁々下子時忘餐

丁々、子を下して時に餐を忘る。

爛柯寧知勝敗決

爛柯いづくんぞ知らん勝敗の決するを。

双策貯水盈忽乾

双策(ザル)水を貯えれども盈ちて忽ち乾く。

強要漸爲車上客

強要して漸く車上の客となる。

猶恨車中無棋盤

猶恨む車中棋盤無きを。

(寒韻 闌、驪、壇、干、丹、瀾、鸞、歎、安、湍、跚、寛、竿、餐、乾、盤)

中国陝西省西安―唐時代の長安―の付近にある驪山温泉、それにも勝さるというので箱根山を勝驪山ともいう。その箱根山中は今や秋たけなわ。そこに墨友八人会合して飲を共にしたという書道天下の盛観。一浴、心の憂さを流し、一盃已に羽化登仙。

竹堂仙人 先駆三杯、早くも陶然として宴会の真つ最中というのに、差される盃をさけて欄干にもたれ、浅酌低唱する、その仙顔前山の紅葉よりも赤し。

流石仙人 五斗の酒にビクともせぬ豪酒、鯨が潮を呑むかのような。盃にはいつもなみなみと注がれていないと気に入ちぬらしい。性来の野球狂で、上機嫌の時にはいつでもホームランが心の中を占領している様子だ。

史邑仙人 芸者を呼べ芸者を呼べと叫ぶのは奈良の仙人、幹事の聞き流しで助かったのは一同と隣家の又カミソ。ボンボコ三味線で仙人の串本節か何かを聞かされてはたまったものではないと、経験者は語る。

驪山仙人 高声に、冗談まじりの長広舌(ちようこうぜつ)。口角に飛び散る泡は瀧つ瀬を思わせる。酔うたあげくの狂草、足元と共にゆらりゆらり。

移山仙人 神妙に医戒を守って独り傾ける炭酸水、終始ニコニコとして一同の酔態を見守る。ゆったりとして心の寛い仙人。

芳翠仙人 一酔、半睡、夢ともなくうつともなく。湯にひたつても猶見つづける夢。日は上つて已に三さおばかりというに。

苞竹仙人、泰雲仙人 食事でも忘れて碁盤を離れない両仙。だが、たとえ斧の柄がただれようとも勝負はつくまい。二つの策(ザル)に水を貯えようとするのだから、満ちたかと思うと忽ち乾いてしまう。無理に引きたてて車に乗せたが、おれの方が好かった、イヤ乃公が勝っていたとまだ争っている。車中に碁盤のないのがいかにも残念そう。

通釈が甚だ粗雑で、表現できなかったが、原詩を直接に見つめるならば、竹堂先生の調和体の粹なところ、流石先生の所作の細部に拘泥しないところ。史邑先生の遺望察すべく。驪山先生の酔仏ぶり、移山先制の君子の状。芳翠先生の文人型。苞竹泰雲両先生の闘志満々型。それぞれ感得される筈である。

後日譚(はなし)、この作発表されるや否や「策とは怪しからん」との物言がついた由である。策は策でも、当時の書道界の代表者を鏤刻したこの重要文献の大団円を飾った真打ち策である。また以て冥すべし。

又この作から連想されるのは杜甫の馴染み深い飲中八仙歌。それには韻字を重ねて用いた処があるとよくいわれる。即ち、先韻二十一韻のうち「船」「眠」「天」「前」が夫々累韻されてある。だが、杜甫は、全句に韻を挿む柏梁台聯句の体に倣った八つの章を集合して一篇として作ったものだから各章について見れば累韻はないと識るべきである。函山八仙歌は古詩、寒韻十六韻を押まれたところは壯観である。

遊于函嶺

遠朋相会して胸襟を拓く。

環翠樓頭秋正に深し。

霜樹厓に欹ちて錦繡をつらね。

石溪竹を穿ちて瑤琴を弄す。

盃を銜み聖を楽しむ尊中の酒。

岫に対し雲を見る物外の心。

浴し罷んで高歌すれば天暮れんと欲す。

一輪の明月前岑に狂く。

（侵韻 襟、深、琴、心、岑）

武蔵の仙人、奈良の仙人、尾張の、信濃の……国々山々の仙人、秋の函根の環水樓に、つどいにつどう。懸崖の紅葉、竹林天然の玉琴、座には特級の酒樽あれば、外にむしんするものとてもなく、ほら穴を出る雲と共に思慮から開放された列仙、旅塵を流し高らかに歌う明月の前。

当時書海漢詩欄の選者であつた仁賀保香城先生この作を評して「詞筆の研麗、胸次の閒逸、人をして当日の勝進を想わしむ。」と。

憶江南舊遊

二十年前同じく槎を泛ぶ、

江南の風物人に向って誇る。

緑は垂れ姻外短長の柳、

紅はつぐ雨中濃淡の花。

（麻韻 槎、誇、花）

函山八仙歌と双璧をなす來吉齋記。八仙歌に先立つ二年の昭和六年春芳翠先生は、仁賀保香城、河井荃廬、生出大壁、柳田泰麓、武田霞洞、川村驥山、西川靖盒、西脇吳石、柳田泰雲、三浦英蘭、山本李邨の文人と共に総員十二名中華国に遊ばれたこと、その來吉齋記に依つて知らるる。その回想がこの一首であろう。転結妙対句、宛然画の中の江南に共に遊ぶ思いがする、來吉齋は芳翠先生の別号。世にも稀なる縁起を識ることができるのみならず、登場人物が賑かで、前記同人の外に服部耕石翁、蘇東坡、秦少游、金山寺佛印禪師、王猛、それに良寛和尚の十八名の外に血を分けた半風子を加えると無数となる。文人趣味の醍醐である。

姉崎舟游

漁簣画し来る滄海の波。

退潮十里平沙を見る。

魚紋忽ち乱る歓声の裡。

鷗鷺群がり飛ぶ浅水の涯。

（歌韻 波、少、涯）

海原の一角を囲んで實を立てる。潮が引いて広々とした遠浅。實に取りかこまれた魚類は退路を断たれて右往左往する。中に降り立って、掴み取り、掬い取り、突き取り、きやつきやと大騒ぎである。機心を生じた鷗や鷺も獲物をねらってか飛び廻っている。房州姉崎の雄大な風景。

戯寄某先生

如流才筆墨壇に稀なり。

品隲縦横隱微を衝く。

只恐る三人同日の評。

豈に玉石混淆の誹りなからんや。

（微韻 稀、微、誹）

流暢な文章を書くこと書道界稀に見る先生、書の品さだめに中々するどい。それはいいのだが三人一山の評はどうであろうか。玉を以て自任する書伯はこう言いはしまいか。「崑岡に玉を采るに、玉石磊砢たらば、愚者いづくんぞ別たん」と。他の自任玉書伯も卞和氏の相玉眼を以て郁々の文才を揮うべし」というであろうし、第三の自任玉書伯更にいうべし「崑岡の玉と燕山の石とは、日を同じゅうして談るべからず」と。品隲先生に調諷（からかいたわむる）の一矢。

猿 橋

奇勝猿橋天下に聞ゆ。

断崖千尺水文を成す。

潭に臨んで釣を垂れ、時に首を翹げれば。

寸馬豆人碧雲を行く。

（文韻 聞、文、雲）

中央線猿橋駅より一・五キロの東にある桂川の峽流に架けられた橋、日本三奇橋の一として天下に聞えている。橋の長さ三一メートル、幅五・五メートル、両岸から数本の刳木を出してその上に架けてある。橋上より水面まで三十三メートル、国定忠治、飛び降りるとき千尺とも感じたろう。詩人も橋下に下り釣糸を垂れたが、ふと天を仰いだら、青空の中を橋渡る馬が一寸、人が豆粒程に見えたという。

竹雨先生評して曰く。「結七字奇想、天外より筆を著く。是の如くならずんば則ち以て此の勝を状するに足らざる也」と。橋畔、文人の詩碑は訪客の誦するところという、この作も刻んで一基加へたく念ずる。

癸巳十一月晦翠石翁祝賀會席上

銀鉤鉄画洩源有り。

方寸の雕虫辛苦存す。

龍顔に咫尺して下問に応ず。
栄光豈に一家の門に止まんや。

（元韻 源、存、門）

銀鉤とは字書に依ると巧なる草書の形容とあるが、ここでは立派な篆書の形容とされる。鉄画とはその文字の線が強いこと、双方で篆刻を意味する。秦漢以来溯源する処遠い。その伝統に基づく字法あり、章法あり、刀法あり、一寸四方の中に鏤刻する苦心。天皇陛下に直々に御答へ申し上げた。御理会を拝受したこと。翠石翁一門のみならず、広く翰墨界の光栄であるとの祝意に満ちた謹嚴の作。

癸巳歳晩

華年冉冉として忽ち推移し。

明旦新たに加う幾鬢絲。

復た一吟の酌酒に堪える無し。

強いて澆ぐ胸裡未成の詩。

（支韻 移、絲、詩）

還暦のみづのとみ年の月日もどんどん明け暮れて明日はきのえうまの元旦である。白髪も幾筋かふえるであらう。さて、唐の賈島にならって今年中に得た詩を祭りたいと思つたが、駄作ばかりで酌酒に堪えるほどの詩が無い（酌酒とは地に酒を注いで神々を祭ること、ここでは詩を祭るおみき）。ええまよ、とばかりまだ胸の中にある未成の詩に酒を注いだ。胸の中にそそぐためには口を、のどを通さねばならない、これをこれ酒を飲むという。この詩を鑑賞し得る方は相当の文人趣味の持主であることを筆者は保証する。

甲午新年 昭和二十九年

寿は一齡を倍し、顔は一皴。

仰いで嶽雪の年と新たなるを看る。

硯を耕やして老の将に至らんとするを知らず。

把酒閑吟、心自ら春。

（眞韻 皴、新、春）

齡一歳を増し、顔にもまた一筋の皴（しわ）。その額を挙げれば富嶽の新雪。元旦の曙光を受けて紅に映えている。平生筆硯を楽しんで、以て老の至らんとするを知らず。それに今日は元旦なので杯を片手に閑吟していると自然に心も春のように和らぐ。

樗盒醉

三杯臨草聖

三杯草聖を臨すれば。

逸氣迸毫端

逸氣毫端にほとばしる。

吐納幾千載　吐納幾千載。

壺中天地寬　壺中天地寬なり。

（寒韻　端、寛）

臨するは文字に非ず、草聖張旭そのものである。一杯一杯復一杯。筆を執れば意気毫端にほとばしる。この阿吽の息こそは古今に通ずるもので、従つて書遺あつて幾千年の久しきに呼吸するものというべく、かくて壺中に等しい樗盒の天地も自ら寛やかなるを覚える。吐納は呼吸に同じ。

與畊硯會諸公遊于濱金谷

探奇攬勝總房邊　奇を探り勝を攬る総房の辺。

鷗鷺訂盟文字縁　鷗鷺訂盟文字の縁。

擲筆高歌憑檻望　擲筆高歌、檻に憑つて望めば。

鋸山萬仞割青天　鋸山万仞　青天を割く。

（先韻　邊、縁、天）

世外に超然たる詩書の友、上総安房の奇趣、勝景を探つて、行く先は浜金谷。酒數幾許。詩稿成つて筆を擲うち、高樓のてすりによつて高らかに歌いつつ碧天を仰げば、青空をふたわけざまに聳えたつ鋸山、意気万丈。

竹雨先生曰く、雄景を描き出して、筆々亦た青天に立つと。

次鶉南莊主人見似韻

罰酒三杯忽ち赭然。

風流尚憶う永和の年。

緑陰深き処髭を拈つて坐す。

夢は石泉を繞つて普賢を追う。

（先韻　然、年、賢）

鶉南莊主は柳井氏である。天文にて「井宿より柳宿に至るを鶉酉という」とあるから鶉南の莊名は余程床し（ゆか）しく思われる。その鶉南班の曲水の筵。永和九年の蘭亭を懐い、普賢義之を偲ぶうち盃はどんどん流れ来り流れ去る。朱盃、緑陰、赭顔、黒髪、色彩亦鮮麗。

鶉南莊即時

識字又爲憂患來

識字また憂患と爲つて来る。

暫遺世事坐蒼苔

しばらく世事をわすれて蒼苔に坐す。

仰聽爽籟心逾遠

仰ぎて爽籟を聴けば心いよいよ遠く。

俯見遊魚顏自開

俯して遊魚を見れば顔自ら開く。

（灰韻 來、苔、開）

蘇東彼も曾て曰つた。人生字を識るは憂患の始めと。字を識っている許りにまたしても苦吟の席に列つたが、しばらく座を外し、世事を忘れてひとり樹下に憩い松風に耳を傾け、苔に坐し、真鯉緋鯉を見ているうちに、出来た。憂患忽ち去つて悠々閑たり。

竹雨先生評して曰く「落々(志の大にしてすぐれたるかたち)下筆、氣味間断(しづかにしてひろい)。後半対格を用い、自然拍を合す。愈々其の妙を覺ゆ」と。

対格、原文で再現すれば左の如くである。

仰聽爽籟心逾遠、

俯見遊魚顏自開

左右の各文字を対照して妙を覺(さと)られたい。

初夏雜詠

山房幽寂、画門を閉ざす。

独り南窓に倚つて竹孫を数える。

細雨声なく梅子落つ。

蝸牛自在茅軒に篆す。

（元韻 門、孫、軒）

初夏の昼下がりがり、どこかで庭師の鋏の音がしきり。樗庵門を閉ざしていよいよ静かである。南縁から庭の筍の数を数える。いつしか降るともない霧雨。梅がぼとんと落ちた、おや、門前のかたつむりも潤いを得て自在に篆書を書き出した。

戲題驥翁通路圖

聞く君患後杯觴を遠ざけ。

信山泉石の郷に伏櫪すと。

何ぞ計らん四州に驥足を伸べ。

巡回す八十八霊場。

（陽韻 觴、郷、場）

好きな酒を断つて、信濃の山の林泉に病余を養つておられると承っていたが、あに計らんや、四国に渡り、健脚に任せ八十八ヶ所を巡礼してまわっているとは。と、水の流るる如き一首であるが用語が極めて適切である。伏櫪とは厩の中で安閑と養われていること、武帝の詩の

「老驥櫪に伏するも志は千里に在り」を踏まえた用法。
驥足―駿馬の足であって転じて才能ある偉人に例えてある。驥は一日千里を行く名馬、驥足を伸ぶとは豪傑が十分その才を展ぶるに例える。兼ねて驥山先生の健脚を指すこというまでもない。

賀門野重九郎翁米壽

素澹年々肅霜におごり。

閱し来る八十八重陽。

高風比するに堪えたり蓬峯の雪。

逸韻深く欽ず栗里の香。

（陽韻 霜、陽、香）

門野重九郎という人は大倉組副頭取で曾て欧米視察日本実業団の団長などをも務められた実業界の大立物で、重陽即ち九月九日菊の節句生れであるため重九郎と名付けられたという。翁の高潔な風格を素艶、即ち白菊に例え、年々霜雪を凌いで遂に八十八才を迎えられたのは誠にめでたいことだといひ、更にその潔白さを富士山の雪に例え、その隱逸さを陶淵明に比して一対の聯句とし、深く欽慕するとの祝詞。栗里は陶淵明の居住した処であるから、その心も踏まえられたものであらう。

題竹林七賢圖

采薇、豈に仿わんや西山に餓ゆるに。

独醒、何ぞ須いん碧湾に投ずるを。

臂を把つて逍遙す、別天地。

百年一笑、竹林の間。

（刪韻 山、灣、間）

采薇とは周の武王、殷に代つて立つに及び伯夷、叔斉、周の粟を食うことを恥ぢ、首陽山に隠れゼンマイを采つて食ひ遂に餓死したという故事である。七賢はそれにならはない。独醒とは屈原を指す。楚の懷王に仕え、三閭大夫となり国政を執つて信任されたが同列の大夫に妬まれて「離騷」を作り王の感悟を冀い、懷王の子襄王立ち亦謗りを信じて屈原は長沙に遷された。そして終に石を抱き汨羅の池に投じて死んだ、それを指す。七賢はそれも用いない。互に臂をとり合つて浄界に遊び、生涯を竹林の間に笑い暮らしたのは賢とすべきであらう。それは晋の阮籍、嵇康、小涛、劉伶、阮咸、向秀、王戎の七人である。

呈青園女史

節陽春を過ぎて日斜めならんと欲す。

紅灯照し出だす可憐の花、一枝特立、何ぞ幽婉。

金屏に倚らず墨紗に倚る。

（麻韻 斜、花、紗）

節句を過ぎた徂春の陽も暮れようとしている。紅灯は粹な光、それが可愛い花を照らしている。一枝、何を静かにも美しいことか。それはきらびやかな金屏風の前でなく、墨書された紗の沌に立つので一層床しい

と。この詩を頂戴した青園女史とは抑々何んぞ。李白日く、笑って答えず心自ら閑。

川治温泉即事

浪漫車（ロマンスカー）は馳す田野の間。

北行卅里始めて山を看る。

溪頭の漁父吾に向つて揖す。

嵐気窓を襲いて酔顔を吹く。

（刪韻 間、看、顔）

ロマンスカー三十里走つて始めて山を見る広い武蔵野、山にかかろうとする、速力がゆるむ、溪河のほとり、釣竿のおやじと顔が逢う、心通じたか互になつこり。はて、いつの間に聞こし召したか、ほてった顔に谷風が。山川草木総べて是れ友。

筆硯曾て聞く佳友を得と。

先賢の語吾れを欺かず。

一たび逢うて忽ち十年の識となる。

同座九人皆墨徒。

（虞韻 吾、徒）

「筆硯得佳友」（文筆の趣味を持てば、良い友が出来る）という語句があるが、昔の賢人の語はまことに我れを欺かない。一旦逢うと十年来交際したと同様に親しくなるものだ。ここに相会する九人は皆その筆硯の佳友であると淡々たる吟詠の内に、私もその一人になつた様な氣持になつた。

四山雨過ぎて緑いよいよ鮮。

溪間杯を把つて石泉を聴く。

一曲の絃歌幽興を助く。

醉来爛漫を対して眠る。

（光韻 鮮、泉、眠）

とりわけ立派な山々、一雨に洗われた新緑、谷間の高殿、流水の琮々、かすかに三味線の音、酔余枕をならべて夢中亦詩。

迎寒泉翁席上博一笑

名園曾て共に逍遙を恣にす。

陋巷今迎えて一瓢を同じゅうす。

劫後飄零詩、癖をなす。

十年鶴膝又蜂腰。

（蕭韻 遙、瓢、腰）

かつては、手を携えて立派な林泉を心ゆくまで楽しんでめぐり遊び、今はこの小路の奥の住居にお招きし

て一本の酒を分けて飲みあうという滋味津々たる対句一起句は莊子に基づき、承句は論語に拠る一さてさて戦後は落ちぶれたもんですが詩を作ることだけは、癖になって止められず、十年このかた蘇東坡に笑われそうな鶴膝や蜂腰ばかり作っていることですよ。と賓主真率。

裁錦會席上分韻得鹽

千章の夏木塵炎を隔つ。

半架の詩書一桁の簾。

斯苑誰れか能く珠玉を拾う。

明窓几を掃つて新縑を染む。

(盤韻 炎、簾、縑)

一目千本の夏木立。ゆったり詩書の置かれた書棚、すだれが時折ゆらいで、明るい窓近く紫檀の机が置いてあって、その上に新らしいまつしろな書絹が延べてあるという。会場そのものがすでに詩である。そこで誰が真つ先に立派な詩を書くであろうか。さう先ず隗より始めよ。

偶 成

五十餘年拂硯塵

五十余年硯塵を払う。

常忘聲色只求眞

常に声色を忘れて只眞を求む。

知音千載道悠久

知音千載道悠久。

不礙喚成癡絶人

さまたげず喚んで癡絶の人と成すを。

(眞韻 塵、眞、人)

世間の毀譽褒貶をよそに筆硯に親しむこと五十年、ただひたすらに眞を求める。眞は神であり、自身である。知音は千年後にでもあればよろしい。先ず、自己を、眞の自己を捉えねばならない。人は何といおうと。このために古来無数の哲学者は苦しんだ。

長流石建詩碑于千秋村次韻以祝

十似詩碑就る。

仰ぎ瞻る高士の情。

千秋劇迹を留め。

万古清声をなす。

載籍、家に蔵して貴く。

霜毫手に熟して輕し。

他年苔石の面。

双絶人をして驚かしめん。

（庚韻 情、聲、輕、驚）

十ひろもある詩碑が出来上った。碑が高い様に人格も高い。立派な筆跡を永久にここにとどめ、読む人によつていつまでもいつまでも清らかな風韻をひびかせることであろう。書齋にはぎつしりと貴重な書籍をそなえ、手には多年手馴れた筆も軽やかに雲煙自在。思うに年経て苔むした碑面は、更に一段の風致を添えて、詩、書ふたつながら人を驚かすことであろうと、長谷川流石先生を讃えた。この五律対聯の見ごとさに先づ人は驚ろいたであろう。

観天地會展覽會

書人作畫畫人書

書人画を作り、画人は書。

吐露天眞興有餘

天真を吐露して興余り有り。

只恐平生苦心處

只恐る平生苦心の処。

良公一語即非虚

良公の一語即ち虚に非ず。

（魚韻 書、饒、虚）

天地会、実は天と地をひっくり返えした会。書家が絵を描き、絵師が書を作つて見せびらかした。得手でないところに却つてその人の本然の姿が覗ぞかれて面白い。それについても良公の一語「詩人の詩、書家の書、料理人の料理は嫌いだ。」とのいみじくも虚を衝いた言葉。平生苦心の作書が嫌われるとは、とジレンマに興ぜられた作。

さて、良公の一語のような逆説には、色々議論もあるであろうが、夫々の体臭を嫌つてのことであろう。だから、「書家」、「絵師」、「料理人」の上にそれぞれ「自称」という形容語を冠してみるがよい。なお「良公」という人名は「良寛」の和臭を抜いた表現であることを附言する。

書家が画を描き画家が書を作つて展観したこの天地会は、余芸であるところに却つてその人の思わぬ真の姿が現れて面白い。だがこうした余技の方が本業の作品よりも面白いということになると、「わしの嫌いなものは詩人の詩と、書家の書と、料理人の料理だ」といったという良寛の一語を肯定する結果になる。それではいったい平生の苦心はどうなるのか、困ったことではないか。

新涼

夜来の風雨曉来収まり。

油面盈盈として菱茨浮ぶ。

簾外月残して虫語切。

一天の顚氣新秋に入る。

（尤韻 収、浮、秋）

夜どおしの吹き降りも今朝はすっかり晴れあがり、池の水は漫々としてひしだのおにばすだのがゆたかに浮んでいる。あるかなしかにほの白く月がすだれの外に見えて、虫の鳴き声も耳に涼しく、もう秋だな。

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる 敏行

甲子歳晩

劫余鼎々として歳星巡る。

一夢明朝第十春。

賭戲軒を聯な彩燈の外。

奔馳す右往左還の人。

（眞韻 巡、春、人）

終戦はきのうの様な気がするが、月日の立つのは早いもので、一夜明ければはや十年目の正月。軒なみパチンコや、ネオンサインのつづく暮の街を夥だしい群集が、それでも新制の右側通行にも漸く馴れたかしてしきりに右往左還している。

乙未歳旦 昭和三十年

劫後迎來第十春

劫後迎え来る第十春。

東窗試筆頌佳辰

東窓筆を試みて佳辰を頌す。

世情翻覆追時變

世情翻覆時を追うて変じ。

嶽色玲瓏與年新

嶽色玲瓏年とともに新。

明粕清糟徒没性

明粕清糟徒らに性を没し。

漫塗亂抹却驚人

漫塗乱抹却って人を驚かす。

撫模形貌非吾事

形貌を撫模するは吾が事に非ず。

遡古須窮風韻眞

古に遡って須らく風韻の真を窮むべし。

（眞韻 春、辰、新、人、眞）

心静かに書き初めをして元日を祝う戦後満十年の春。西の方富岳、玲瓏として、常と変らないが元朝は心の持ち様か特にすがすがしく見える。それに引きかえ、世情は日を逐って変転する。書道界に目をやれば、徒らに明、清の糟粕をなめてあたら個性を没却し、或は出たらめの塗抹で俗限を驚かし得々たる有様、外形のまねなどは我々のすることではない。宣しく古聖賢の真を究わめ、その高風、神韻を体すべきであると。この中聯の強いバックボーンを見て開眼すべし、尾聯の雷音を聴いて耳道を拡げるべし。

竹雨先生曰く「新をかざし異を立て沾沾自ら喜ぶ。時流のおもむく所。比比皆然り。吾兄の開歳第一聲、中に深く規諷を寓す。」と。

試筆

迎春憑淨几

春を迎えて淨几に憑り。

掃素録嘉言

素を掃って嘉言を録す。

樂只千秋道

樂只千秋の道。

世譽何足論

世譽誰か復た論ぜん。

(元韻 言、論)

昭和三十年一月五日、晴天、樗盒に詣り師顔を拝す。と筆者の日記にある。そのとき師は淨几に憑っておられ、莞爾として天地金の白扇に墨華香ぐわしきこの詩を私に賜わった。但しその時の結句は「世譽不足論」となっていた。紋服を着る時必ず私はこれを秘笈から出して、宝刀然と袴にたばさむ。「樂只」は「たのし」という意。只は助語で、別に意味はない。

宸題泉

一道淙淙石澗泉

一道淙々たり石澗の泉。

沿崖曲折入深淵

崖に沿って曲折、深淵に入る。

落爲飛瀑激爲瀨

落ちて飛瀑と為り激して瀨と為り。

奔注大瀛浮巨船

奔って大瀛に注いで巨船を浮かぶ。

(先韻 泉、淵、船)

「灯」は昭和三十年の御歌所詠進和歌の御題である。樗盒の壁面にこの作を拝読したとき、起句を吹上御苑の写生句かと思った。読み進んで行く内、これは大したことだと思った。青海に発し、雲南、四川、湖北、江西、安徽、江蘇を通り東流して黄海に入るあの楊子江か、いや、いや、師の学書の跡でもあろう。

竹雨先生の評に「筆亦た澗泉の如く、崖に沿いて流下し、曲折奔注す、変化測るべからざる也」とある。

賀三浦野方翁華甲

新門装就迓春風

新門装就って春風を迓う。

風雅絶倫華甲翁

風雅絶倫華甲翁。

高興何人朝奏樂

高興何人か朝に樂を奏す。

遏雲妙響石垣中

雲を遏（とど）める妙響石垣の中。

（東韻 風、翁、中）

「劫余詩存」の原本を御持ちの方方は起句第四字目の「成」の字を「就」にお直し下さい。誤植ですから。さて私事にわたって恐縮ながら「還暦の翁の我や子の設けし新石垣の石門にたつ」外二十三首の短歌連作を師の一葉に供して間もなく昭和三十年一月九日芝浦園に於ける書海社新年試筆会で、「書さ進みたもうに心悸昂まりぬ我がためにせさす詩書と思いて」の詩書が即ちこの原詩である。詩意を、「できあがった新しい門の前に、風雅絶倫な還暦の老人が春風に吹かれて立っている。と、誰かが朝早くから興味深げに音楽を奏でている。その雲をとどめる程の妙なるしらべはその石垣の中から響いて来るではないか」と解し冷汗をかき乍ら、有り難くなったことであつた。

「遏雲」というのは故事に基く言葉で、列子湯問篇に「薛譚（なる者）謳を秦青（なる者）に学ぶ。未だ青の技を窮めざるに、自らはを尽くせりと謂う矣。遂に辞して帰る。秦青止めず、郊衢に、はなむけして節を撫し悲歌すれば、声は林木を振わし、響は行雲を遏む。薛譚すなはち謝し、かえるを求め、終身敢へて帰ると言わず」とある。弟子が師匠を凌駕するということは中々有り得るものではない。さて遏雲の妙響とまでほめられたのは実は私の倅で当時まだ学校出たての駆け出しピアニストであつた。一詩父子を頌されたときの私の心悸の昂まり、乞賢察。

野方翁有詩次韻却寄

野方自有野方風

野方には自ら野方の風有り。

辛苦何須學乃翁

辛苦何ぞ須いん乃翁を学ぶを。

吐露胸懷工拙外

吐露胸懷工拙の外。

雅人深致見其中

雅人の深致其の中に見る。

（東韻 風、翁、中）

さて筆者の私は前詩を拝領、感激の余り六十の詩習いを初めた。而も拝領詩の次韻「臨書して日夜高風を慕う。廿歳唯だ余す一禿翁。曲裏陽春師影を仰げば。墨香琴韻堂中に満つ」を呻吟の結果辛うじて師の函丈に捧げた。之に対し疊韻して累ねて拝領したのが、この標題の通りである。

「野方には野方の行き方があるであろうから何も無理して自分の風をまねることはないではないか。胸中の懷いをうちあけることに拙い工はないので、素朴の内にこそ、ゆかしいおもむきは現われるものである」との仰せ。私は今日に到るまで拳々服膺しており、かつ生涯拳々服膺して自己顕現に努めて行くつもりである。そのシンボルとして自今「有風」の別号を用いる。

悼佐藤曉雨博士

三折肱成橘井仁

三たび肱を折って成す橘井の仁。

興來閑拂硯池塵

興来つて閑には払う硯池の塵。

爾今誰與論風雅

爾今誰と共にか風雅を論ぜん。

園柳山華空自春

園柳山華空しく自ら春。

（眞韻 仁、慶、春）

自らの肱を三たびも折る思いをして身を犠牲に供し、医の仁術を施すに努めておられるかたわら、興味が湧くと静かに筆硯に親しまれたが、今後誰と風流文雅を語り合おうか。柳は緑、花は紅。徂く春と共に雅友はあだし野の露と消えて今や亡し、ああ。

作者自注に曰く「君の居室、常に三折肱の扁額並びに園柳山華の楹聯を掲ぐ。共に余の所作なり」と。

「三折肱」とは春秋左氏伝に「三たび肱を折って良医と為るを知る」とある。また園柳山華の楹聯の全文は「數枝園柳低衣桁。一片山華落筆操牀」。(數枝の園柳衣桁に垂れ。一片の山華筆牀に落つ)

賀芳湖有田善吉大人古稀

共分硯水亦前因

共に硯水を分つも亦前因。

淡雅交遊幾十春

淡雅の交遊幾十春。

積善之家有餘慶

積善の家余慶有り。

光風霽月古稀人

光風霽月古稀の人。

（眞韻 因、春、人）

淡々たる雅情、君子の交りを続けること幾十年。共に硯の水を分け合うのも前世からの因縁であろう。初夏の光る風の如く雨後の月の如き心の高明なること、古来稀なる積善の翁。と古稀寿を祝された。筆者もこの瑤韻を次いで祝辞を呈したのであった。

悼小川迪堂翁

月前花下同斯讌

月前花下斯讌を同じゅうし。

秋雨春風共一尊

秋雨春風一尊を共にす。

今日盍簪君不見

今日盍簪君見えず。

掀髯何處占乾坤

掀髯何れの処か乾坤を占む。

（元韻 讌、君、坤）

月に語り花に吟じ、秋には雨、春には風、詩酒を共に楽しんで来た君が今日のこの会合に見えない。今頃は九天九地の何処に髯をすごいているのだろうか。とんぼつり今日はどこまで行ったやら、それは童子、これは翁。

臨池偶拈

學書期養拙

学書養拙を期す。

六十未成功

六十未だ功を成さず。

先哲工如拙

先哲は工、拙なるが如く。

今人拙似工

今人は拙、工に似たり。

（東韻 功、工）

ここに到ってペンがはたと止った。一筋縄では了解できない。形式論理では矛盾を出られない。謎である。謎には鍵が要る。私は「拙」を天然の素朴な本質、約言して「素質」と置き換えることを鍵としてみた。すると、起句は、書を学ぶならば、素質を養わねばならん、素質を陶冶、琢磨すべしと解せる。承句は、六十未だ素質の真を発揮できない、となる転句を、先賢の工なること、彫琢の跡みえず、天然の素質そのものの如く。結句の、今人の素質は、それを何物かで粉飾し、素質が見えなくなった、と解したら誤解であらうか。竹雨先生の評言に訊いてみよう。曰く「其の拙を養って能く其の真を得。是れ学書の真訣なり。道に志す者は、宣しく此の語を三復すべし。」と。

壽荷花莊主人華甲次其自述韻

藕莊二月我曾過

藕莊二月我曾て過ぐ。

想見滿園紅與皤

想見す満園紅と皤と。

花信例空埋篋底

花信つねに空しく篋底に埋もれ。

長嗟心事背乖多

長く嗟す心事の背乖多きを。

（歌韻 過、皤、多）

藕は、はちす、藕莊即ち荷花莊、そこを先年の二月訪ねたことがあった。満田の敗荷、夏の紅白荷花の盛りを想わずに充分であった。年毎の莊主からの花のたよりは、空しく文箱の中に積累ねられたままとなっている。事、志と違うことの、かくまでに多いことかと嘆かねばならなかった、と。六十年一夢と過ぎ知らぬ間に頭はまっ皤（しろ）だ、人事の經過河水の如く赴きて回らず、晩年に悔むこと多し、という意味の原韻を次いだ作。

羨君雨讀又晴耕 羨む君が雨読又晴耕。

六十春秋一至誠 六十の春秋一至誠。

福壽双全潤身屋 福寿双全身屋を潤おす。

風流翰墨亦天成 風流翰墨亦天成。

（庚韻 畊、誠、成）

雨には読書、晴には耕作、六十年一至誠を以て貫ぬかれた。されば福徳長寿を全うし家門栄え、風流の道、翰墨の場に遊ばれるも、自然の現象なりと羨まれた。転句は「徳潤身、富潤屋」の句を巧みに転用されている。春播き秋の取入れにつとめて耕し。余生につくす丹誠。ひま行く駒の空しく老いて宿志を果たすこといつの日に成ろうとの意味の原韻に次韻を以て応えられた。

壯年意氣未全除 壯年の意気未だ全く除かず。

華甲何曾學隱居 華甲何ぞ曾て隠居を学ばん。

只有平生文字癖 只有り平生文字の癖。

行尋金石坐繙書 行いては金石を尋ね坐しては書を繙く。

（魚韻 除、屠、書）

壯者を凌ぐ還暦翁、隠居などとは飛んでもない、書道趣味にまかせ、動にしては鼎鐘碑版を訪ね、静にしては読書に没頭されることであらうと。度山のみどりを取り入れた除（にわ）、木曾川の流れに沿う里のすま居、この楽しみを誰が知る、冬の夜、雨の日親しむは右軍の書、という意味の原韻に酬いた作。

竹雨先生評して曰く「意切に句緊に、一の冗墨なし、原唱と併せ観て、愈々其の妙を覚ゆ」と。

祝西川靖盒兄受賞

稀行種竹吉羊春 稀行竹を種う吉羊の春。

大字鈔書眞絶倫 大字書を鈔して真に絶倫。

今日榮譽非偶爾 今日の榮譽偶爾に非らず。

名門夙見石麒麟 名門夙に見る石麒麟。

（眞韻 春、倫、麟）

「稀行種竹容風入、大字鈔書向月看」という日展出品が芸術院賞の対象となったに次いで祝詞である。

換骨奪胎の妙至れりというべし。

竹をまばらに植えてゆったりしたためたい春、「吉祥」は「吉祥」でめたいという言葉とともに、靖齋先生の別号でもある。大文字をうつしては比類のない大技倆、芸術院賞受賞という今日の栄誉まことに当然である。西川春洞翁の息であり、とつくに麒麟児の名をほしいままにされていた君だもの、と。石麒麟については竹雨先生の評言に俟つ。即ち曰く「徐孝穆、八才にして文を能くす。釈宝誌その頂を摩して曰く、これ天上の石麒麟也と、移して以て靖齋に贈る、瓊瑤に勝ること万々なり。又曰く、芸林の二雄斉しく名を江湖に馳せ、相交るに道を以てす、すなはち期許の深さを見る。」と。

呉山石

朝見崇山色

朝に見る崇山の色。

夕聽幽壑聲

夕に聴く幽壑の声。

携來一拳石

携え来る一拳石。

憶得遠遊情

憶い得たり遠遊の情。

（庚韻 聲、情）

呉山の石は曾て中華歴游の時、「立馬呉山第一峰」という名句のある呉山に登り頂上にて採取された拳ほどの石のこと。

楊柳枝詞

垂柳橋邊日欲斜

垂柳橋辺日斜めならんと欲す。

一塘芳艸路三叉

一塘の芳艸路三叉。

春風嫋々度江水

春風嫋々として江水を度り。

吹入緑楊深處家

吹いて入る緑楊深处の家。

（麻韻 斜、叉、家）

橋も、たもとの柳も夕陽を受けている。川沿いの道には香ぐわしく草が萌えて、そよそよと川づから吹いて来る春風は、芽ぶいたばかりの柳の枝をなぶつてその奥の家にぬけた、と。潮来あたりの水郷か、はたまた柳橋あたりの狭斜か。

これは題詠で、唐賢の「楊柳枝詞」にならうもの。

題書海社同人合作屏

古帖朝臨分硬水

古帖あしたに臨して硬水を分ち。

新詩夕校上雲箋

新詩夕べに校して雲箋に上る。

盍簪那問他鄉客

盍簪なんぞ問わん他郷の客。

結得風流翰墨縁

結び得たり風流翰墨の縁。

(先韻 箋、縁)

朝には硯の水を分ちあつて、古法帖の臨書、午後は詩を作りくらべて詩箋に書く。文人墨客相会すれば十年の知己。合作の屏風まことに風流翰墨の縁の象徴である。

盍簪とは、朋輩のより集まること。昔は男でも髪結ってかんざしを差していた。その簪がふれ合う程に何でなつくか顔よせて。

注 この詩のように平韻七絶の起句の末字に韻を用いないで仄字となっているのを押しおとしと称する。但し、ふみおとしの場合は起句と承句が対句になる約束ありと聞く。本詩の場合、理想的な対句をなしている。

夏目臨池

鎖夏不須尋還巒

鎖夏須いず還巒を尋ぬるを。

臨池獨坐小齋寛

臨池独り坐すれば小齋寛なり。

興來筆落龍蛇走

興来つて筆を落せば龍蛇走る。

満壁雲煙袖手看

満壁の雲煙手を袖にして看る。

(寒韻 巒、寛、看。)

夏を涼しく暮そうなどと山に出かけるには及ばない、書齋でゆっくりお習字するに限る。紙上に龍蛇を走らせ、これを懸けて眺めると壁一ぱいに雲烟がただよい、ふと気付くと懷手をして眺めているくらい。暑さを忘れるに充分である。

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日に庵に籠りて蠅殺すわれは 子規

受賞記喜

不趁時流不覓譽

時流を趁はず誉をもとめず。

揮成七字正楷書

揮い成す七字の正楷書。

何期文府藝能選

何ぞ期せん文府芸能の選。

一舉大鵬翔碧虛

一舉大鵬碧虚を翔ける。

（魚韻 譽、書、虚）

大鵬一舉九萬里、燕雀には企ても及ばない、雄飛。

竹雨先生「大鵬一舉、飛んで碧虚に入る。独だに君家の栄選たるのみならず、真個芸林の盛事なり」と評された。

遊於熱海起雲閣

千年松柏鬱參天

千年の松柏鬱として天に参じ。

激瀦波光照檻前

激瀦たる波光檻前を照らす。

手把壺觴閑弄筆

手に壺觴を把って閑に筆を弄す。

起雲閣上起雲煙

起雲閣上起雲煙。

（先韻 天、前、煙）

千年の龍鱗翠蓋を掀げ、波光欄干に映ずるところで酒盃と筆をこもこも持ちかえては樂焼に興じ、起雲閣上でその名の如く、しきりに雲煙を起したのは楽しい遊びであった。

柳井氏鶉南莊詩筵分韻得侵

昨遊尚記綠槐陰

昨遊尚記す緑槐の陰。

今日把杯花下斟

今日杯を把って花下に斟む。

柳眼舒青引詩客

柳眼青を舒べて詩客を引く。

一泉一石盡知音

一泉一石尽く知音。

（侵韻 陰、斟、音）

いつぞやは緑陰に槐安の夢を結んだが今日は花に酔う。柳の葉は緑をひろげて詩情をそそる、満園の一草、一木、一泉、一石すべて知己ならざるはないと歎を極わめた一首。

竹雨先生評して曰く「柳眼の一句は暗に主人を点す。手段の妙以て加うる蔑し焉」と。

「柳眼青を舒べて詩客を引く」の句は主人柳井寒泉翁が青眼を以て詩客を歓待したことを云い暗に謝意を

のべたものだと、その手段の妙を称せられた。

乙未四月與研海孤舟熹齋觀光帝都

赤氈纏得上鳩車
赤氈纏い得て鳩車に上る。

舊跡名園向客誇
旧跡名園客に向って誇る。

東道阿嬢嬌舌滑
東道の阿嬢嬌舌滑らかに。

如聞黃鳥亂蹄花
さながら聞くごとし黄鳥の花に乱蹄するを。

（麻韻 車、誇、花）

赤氈を纏ったのではなくて、赤毛布のお上りさん達に混じって「はとバス」を利し、東京見物をされたのである。旧所名跡ごとごとく案内して得意気な、立板に水のガイドガール、名所のアクセサリー、鶯嬢とこそ申すべけれ。

岳温泉二首

峰巒經雨緑逾清
峰巒雨を経て緑いよいよ清く。

谿水韻和絲竹聲
谿水の韻は和す絲竹の声。

數曲離歌半壺酒
数曲の離歌半壺の酒。

忘郷一醉不知更
忘郷一酔更くるを知らず。

（庚韻 清、声、更）

山雨一過緑いよいよ冴え、蕩々の谿声に和する三絃と笛。強いて、家を忘れんとてか迦陵頻伽の別れの曲、清遊豪飲、月五更。

撥絃鸞鳳舞天壇
絃を撥えば鸞鳳天壇に舞い。

點墨龍蛇躍筆端
墨を点ずれば龍蛇筆端に躍る。

興到飛觴詩未就
興到り觴飛んで詩未だ就らず。

半簾花影倚勾欄
半簾の花影勾欄に倚る。

（寒韻 壇、端、欄）

三絃のばちをはらえば、忽ちひるがえる霓裳羽衣の袖、墨を点ずれば忽ち巨龍長蛇目前に躍る椽大の筆。かくて玉盃の応酬にいそがしく、詩を作る暇がない。勾欄に倚るは花か、人か、そのまま詩となった。

竹雨先生曰く「境已に清幽、詩また雅練、写し出だす夜飲の状、筆々凡ならず、花影の七字、尤も清婉を覚ゆ」と。

泊小湊

七百年來鎮法城

七百年來法城を鎮ず。

傑僧遺跡海山清

傑僧の遺跡海山清し。

潮平日落無雲形

潮平らかに日落ちて雲形無し。

千點漁篝破闇明

千点の漁篝闇を破つて明らかなり。

（庚韻 城、清、明）

日蓮上人誕生の地、小湊、妙の浦、誕生寺、清潮山の修業堂。お祖師様といわねばしかられる位、厳格に滴淨に遺跡が護持されている。太平洋に面して、平穩に日は暮れた、雲は無いが更け行くままに海上の闇を破つていさり火千点。

竹雨先生曰く「靈場を写し出して、筆々清警。闇を破つて明かなりの三字、殊に用字の、妙を覚ゆ。」と。まことに日蓮は法華の妙法によって一世の闇を破つて光明を与えた傑僧である。

來吉齋偶成

名利紛々慕蟻醇

名利紛々として蟻醇を慕う。

翻雲覆面眼前新

翻雲覆面、眼前に新たなり。

洗心孤坐臨池室

洗心孤坐す臨池の室。

一部圓珠思古人

一部の円珠古人を思う。

（眞韻、醇、新、人）

名譽や利益のためにはまるで蟻が味淋にたかるかの如く、「手を翻えせば雲となり、手を覆えば雨」という軽薄そのままである。こんな世情を洗い流すべく独り書齋に這いると机上には肅然として論語が一冊。

聞 蟬

門外清流屋後山

門外の清流、屋後の山。

白雲千里渺鄉關

白雲千里郷関はるかなり。

聞蟬忽憶少年日

蟬を聞いて忽ち憶う少年の日。

父老懽迎遊子還

父老懽び迎う遊子の還るを。

（刪韻、山、關、還）

蟬声を聞いて端なく思い浮べる遠い故郷、あの流れ、あの山、遠地に遊学して暑中休暇に帰省した少年を家中の人々が喜んで迎えてくれた当時を思い出す。その日も屋後の山ではさかんに蟬が鳴いていた。この詩書は欧州各国を巡回した。

遊于新湊泛海龍湖

渺茫龍浦眼前開

渺茫たる龍浦眼前に開く。

天女祠邊載酒回

天女祠辺酒を載せて回る。

片月孤雲涼水如

片月孤雲涼水の如し。

風從立嶺絶巔來

風は立嶺の絶巔より来たる。

（灰韻 開、回、來）

湖水を想わする一首、湘娥ではなく弁天様のほころであらう。宝船に酒を積んで、かたわれ月、ちぎれ雲、立山から吹きおろす涼風に酔心また格別であつたろう。

送筆跡赴歐洲

墨書渡海赴歐洲

墨書、海を渡つて歐洲に赴く。

未識異文能解不

未だ識らず異文能く解するやいなや。

戰後十年道何廢

戦後十年道何ぞ廢せん。

日東傳統二千秋

日東の伝統二千秋。

（尤韻、洲、不、秋）

草書「聞蟬」が渡欧することになった。彼土の人々に果して書の味が解るかどうかは疑問だが、劫火も焼く能はなかった伝統二千年の日東の真。ともかくもよく見て貰うことにしよう。

川治温泉即事

山雨朝來阻出門

山雨朝來出門を阻む。

濁流嚙岸水聲喧

濁流岸を嚙んで水声かまびすし。

龍王峽谷難探勝

龍王峽谷勝を探り難く。

高閣看雲對酒尊

高閣雲を看て酒尊に対す。

(元韻、門、喧、尊)

朝からの雨では温泉も退屈であつたろう。濁流も騒音であつては詩情を妨ぐる。今日は龍王峽谷を探勝する筈であつたが、それも出来ないので、終日高閣で雲を看ながら、酒樽に対した。

田村魚菜氏招飲車行過函嶺

快車走西翦天風

快車西に走せて天風を翦る。

路入函山塵氣空

路は函山に入って塵氣空し。

登盡羊腸望窮處

羊腸を登り尽して望み窮まる處。

忽然身在白雲中

忽然身は在り白雲の中。

(東韻 風、空、中)

純金のキャデラック。東海道をまつしぐら。路は函山に入つてさすがに点塵なく。羊腸の山路を登りつめて展望を恣にしようという十国峠にさしかかった處で濃霧に突入。身は忽ち白雲につつまれてしまった。

臨池偶成

太厭世間塵濁風

はなはだ厭う世間塵濁の風。

時時遊息墨林中

時々遊息墨林中。

追漫流俗傷幽雅

漫に流俗を追うて幽雅を傷らば。

焦土那邊求緑叢

焦土那邊にか緑叢を求めん。

(東韻、風、中、叢)

黄塵萬丈の世の中、時に逃れて墨林の清風に憩うことができる。それなのに、墨林にまで、ほこりを持ち

込む人があるのは解せないことである。そのようなことをしていった人々はこの焦土のどこにオアシスを求めようというのであらうか。

臨池偶成

夙謝風塵累

夙に謝す風塵の累。

何關富與貧

何ぞ関せん富と貧と。

書成鵝不換

書成つて鵝にも換えず。

觴詠一閑人

觴詠一閑人。

（眞韻、貧、人）

俗世間のわづらわしさととは、とつくに縁を切っている。富裕、貧乏、そんなものはどうだっていい。書を作つても王羲之の如くそれを鵝鳥にすら換えることを敢てせぬ自分だ。唯一觴一詠を事とする一閑人に過ぎない。

鑑鄭孝胥筆秋雨賦

千里聞名憶此公

千里名を聞いて此の公を憶う。

曾遊禹域仰高風

曾つて禹域に遊んで高風を仰ぐ。

燈前今夜鑑心畫

灯前今夜心画を鑑る。

後二十年秋雨中

後二十年秋雨の中。

（東韻、公、風、中）

終戦後十年にして中華から噂が聞えて来た。曾つて中華に遊んだとき警咳に接したのであつたが、今この詩書「秋雨賦」に接し、つくづくながめていると二十数年前のあの文雅豊かな風格が思い出されると、折しもしとと降るあるかないかの秋雨の音に一人感慨を深くされる詩人が眼に浮ぶ一首。

「秋雨賦」詩巻は鈴木蓼蘋氏の所蔵で、巻後に跋文を依嘱されたのでこの詩を作つて揮毫されたものと承る。

與鶴心會同人遊于草津酒間即興

鶴心清集雅筵開

鶴心清集、雅筵開く。

同志團欒亦快哉

同志團欒亦快なる哉。

侍座阿矯把絃唱

侍座の阿矯絃を把つて唱う。

草津仙境好來來

草津仙境好來來。

（灰韻、開、哉、來）

鶴心会の清雅な宴会。同志のまどいはまことに愉快千万である。座を取りもつ芸妓のおねえさん三味線ひいて唱い出す。『草津よいとこ一度はおいで……。』

白草津至澁川途上過吾妻溪谷

車轉千林錦繡間

車は転ず千林錦繡の間。

石谿七曲下秋山

石溪七曲秋山を下る。

夕陽染出吾妻峽

夕陽染め出す吾妻の峽。

一道飛泉灑碧灣

一道の飛泉碧湾に灑ぐ。

（刪韻 間、山、灣）

車は一転して全山紅葉の中へと進む。名に負う七まがりの石溪、右に左に錦繡を繡つて下る、折からの夕陽、あかあかと、吾妻溪谷全景を染める中に一筋の瀧、碧潭に落ち込むという雄大な景。能の山姥に「山復山何れのたくみか青巖の形を削りなせる。水復水誰が家にか碧潭の色を染め出せる」と大きく謡うところがある、倭漢朗詠下巻山水による。原作は大江澄明の策文、冒頭の一部である。連想したので附記した。

雨中過勿來關址

憶昔將軍鞍馬過

憶う昔將軍馬に鞍して過ぎ。

金兜緋鎧詠飛花

金兜緋鎧、飛花を詠ず。

古關秋老松聲冷

古關秋老いて松声冷やかに。

暮雨空山一路斜

暮雨空山一路斜めなり。

（麻韻、過、花、斜）

陸奥守兼鎮守將軍源義家の読める歌。

吹く風を勿来(なこそ)の関と思えども路もせに散る山桜かな。

八幡太郎は明治の少年の憧れであった。金色の鍬形打ったる兜をいただき緋威しの鎧を着なし弓をたばさ

んで馬上豊かに飛花を行く源氏の大將。詩人もふと少年の心になった。併し現実はある勿れというこの古閑、秋も深く紅葉さえ散り果てたうつろな山、冷やかな松籟の中に、將軍去つて九百年後の日暮の雨にさみしい閑路を見やったことであつた。

竹雨先生の評に曰く「古を懐い、今を写して風調絶佳。読おわつて案（つくえ）を拍つて妙を称す。」

祝中村春堂翁米壽

齡躋米壽壯如春

齡米壽に躋りて壯春の如く。

尚友居中筆硯親

尚友居中筆硯親しむ。

標得梅花與松竹

標し得たり梅花と松竹と。

貞誠一貫至情人

貞誠一貫至情の人。

（眞韻 春、親、人）

八十八才になられても、青年春堂を思ふする壯健、先生、名を梅太郎といい、書齋を尚友居という。筆硯と共に友も亦尚ぶ―尚友とは古人を友とする義あり―されば名の梅花と共に歳寒三友といわれる松竹を傍に、翁さびたまう春堂先生。ことほぎと写生と。

賀西脇吳石翁喜壽

案頭拳石碧苔封

案頭の拳石碧苔封ず。

憶得吳山第一峰

憶い得たり吳山第一峰。

禹域同遊人未老

禹域同遊人未だ老いず。

筆端三絶墨林宗

筆端三絶墨林の宗。

（冬韻 封、峰、宗）

浄机に鎮まる挙大の石が、みごとに、苔むしている。とれは吳石翁等と共に中華に遊んで吳山第一峯をきわめた折、持ち帰つた吳山の石。あれからもう二十四年、その頃と変りなく元気で居然たる詩、書、画の大御所であるのは何ともめでたい限りである、と吳石翁を称えた。

賀高畑翠石翁喜壽

莞然自比白髯童

莞然自ら比す白髯の童。

淡雅清真推此翁

淡雅清真此の翁を推す。

喜字更加金石壽

喜字更に加う金石の寿。

百年弄鐵一齋中

百年弄鉄一齋の中。

（東韻 童、翁、中）

「白ひげのわらべ」、さっぱりしていて本道をはづさない翁はこう自称して、いつもにこにこしておられる。常に金石を友とする七十七翁、弄鉄齋と称するその工房にとどこもって百年も鉄筆を操つられることであらう、まことにめでたい金石の寿。

以上三首について竹雨先生は「三首三翁をうつし出すこと精切妥貼なり。他人に移すを得ず、尤も用意周到なるを見る」と許せられた。

次韻以賀起延君華甲

羨君完職樂其天

羨む君が職を完うして其の天を楽しみ。

閑臥村莊養浩然

村莊に閑臥して浩然を養うを。

意到筆隨清自適

意到筆隨清自適。

明窓憑几日如年

明窓几に憑つて日年の如し。

（先韻 天、然、年）

長く鉄道省に勤められたが功成り、名遂げて退き、のどかな村に居を定め、静かに天の道を楽しむ。筆端に清真を表わし、明窓の下浄几によつてすがの根の長き春日に詩を思う。高士の還暦を祝する無双の瓊瑤（たまご）。

半谷銜山翁以壯年登嶽所貯金明水作富嶽圖而見贈

壯年汲取金明水

壯年汲み取る金明水。

七十描成不二山

七十描き成す不二の山。

留得乾坤秀靈氣

留め得たり乾坤秀霊の氣。

壁頭日日仰孱顏

壁頭日日孱顔を仰ぐ。

（刪韻 山、顔）

幾十年清澗を保った金明水を以つて富岳を描出した古称翁、画、人共に古来稀というべきである。されば

「日日仰ぐ不二の嶺、放って天地の正気を庵中に磅礴せしむる」と。画と詩と渾然たる双壁を成す。

乙未除夕

戦後星霜彈指過ぐ。 戦後星霜彈指過ぐ。

戦前守歳感如何。 戦前守歳感いかん。

年年試筆太平頌。 年年試筆太平の頌。

不願再書邊塞歌。 願わず再び辺塞の歌を書するを。

（歌韻 遇、何、歌）

戦後十年の歲月はまるで指を一弾きする間のように過ぎ去ってしまった。戦前の年越しの夜を思うと色々なことがあった、何よりもまず今は新年毎に太平を讃歌する詩句を以て書き初めをする様になったが、もう今後は以前のように戦争に関する歌などを書初めに書きたくないものだ。

竹雨先生評して曰く「海やすらげく、河清きは、人々のひとしくのぞむ所、此の作能くその意を述ぶ。出すに婉曲を以てし、十分の清切、妙以って名づくる莫し。」と。

丙申元旦 昭和三十一年

試筆小齋朝迓新。 筆を小齋に試みて朝に新をむかう。

墨華發處別成春。 墨華ひらく処別に春を成す。

天公許我塗鴉癖。 天公我れに許す塗鴉の癖。

觴詠百年塵外人。 觴詠百年塵外の人。

（眞韻 新、春、人）

この原書を朱刷りに写された年賀状を頂戴した、詩の上の「頌春」の隷書を稿本で拝見したい旨をおねだりした処、「印刷屋で汚しましてね」と仰しやつて出して見せて下さった。帰宅したら、その稿本が目先にちらついてたまらない。「野方に保管させて下さい」とラブレターしたら速達していただいた。表装した。一年経った。携えてお返しに行ったら「永久に野方家で保管して下さい。」

答海翁

卿有智仁唯缺勇。 きみ智仁あり唯勇を欠く。

海翁酔後語尤眞

海翁酔後語尤も眞。

生平自笑性難矯

生平自ら笑う性の矯め難きを。

漫厭風塵追古人

漫に風塵を厭うて古人を追う。

（眞韻 眞、人）

あなたは智も仁もあるが勇を欠いていると仰せらるる海翁の酔うた揚句の御言葉はまことに御尤ものである。併し人の天賦の性質はなかなか変え難いもの、私の風塵を厭う天性はつつい今人と事を構えるのを避けて独り古人の清雅恬澹を慕うようになります。

雪暁

春寒如水響沙沙

春寒水の如く響沙々。

被酒重衾臥似蝸

酒を被り衾を重ねて臥して蝸に似たり。

時有孫兒呼我夢

時に孫兒の我が夢を呼ぶ有り。

曉園萬朶一齊花

曉園萬朶一斉に花さく。

（麻韻 沙、蝸、花）

春雪さらさらと音して、底冷えが水を浴びたよう。蒲團をかぶって、かたつむりのように。「おじい様、おじい様」と呼ぶ声。頭を上げると暁の園は萬朶一斉の花。

圍棋

一局方圓勢萬般

一局の方円勢万般。

風雲漸急共忘餐

風雲漸く急にして共に餐を忘る。

奇兵踏破關中險

奇兵踏み破る関中の險。

妙策衝來蜀道難

妙策衝き来る蜀道の難。

（寒韻 般、餐、難）

この作を、函山八仙歌中に挿入したら、物言いどころか、苞竹先生、莞然とされたであろう。

祝大山南面堂喜壽。翁爲看板彫刻界之耆宿

大山終古白雲春

大山終古白雲の春。

南面蓬萊壽域新

南、蓬萊に面して寿域新たなり。

堂主重齡躋喜字

堂主齡を重ねて喜字に躋る。

一刀萬象自通神

一刀万象自ら技神に通ず。

（眞韻 隣、新、神神）

大山南面堂、帝都高台にあり、朝夕富嶽を望み、四時明治神宮の翠に対す。堂主七十七齡を超え、利刃を閃めかして一刀万象。書海社の門頭にその神技を見る。

竹雨先生評して曰く「大山南面、二句にわかし用いて、痕迹をあらわさず、氣韻愈々秀づ。」と。

半風子

王猛は之を櫛つて世事を論じ。

良寛は憐れんで衲衣の中に畜う。

死生俱に委す人間の手。

大悟子、名は半風。

（東韻 中、風）

半風子。王猛はこれをひねりながら政治を論じ、良寛は憐れんで衣中に畜ったと伝えられる。生も死も人間の手にまかせて、大悟徹底している汝の名は半風子。來吉齋又の名半風山、観音寺の本尊仏でもある。

丙申四月朔應觚庵主人之囑揮毫雪月花三聯幅此夜春寒
殊甚翌朝出門忽驚春雪鋪地殘月懸天而櫻花亦滿朶互相
輝映奇趣不可言矣即賦一絕句自題于匣蓋

書就春宵坐啜茶

書就つて春宵、坐して茶を啜る。

雅懷聊適筆頭華

雅懷聊か適す筆頭の華。

平明驚見天奇瑞

平明驚き見る天の奇瑞。

清絶乾坤雪月花

清絶、乾坤雪月花。

（麻韻 茶、華、花）

觔庵、ささら庵と読む。主人茶を好む。茶筌に似て非なるものに、ささら有り、「觔」亦本場物でなく国字である。茶碗の如くひねつてある。さて雪、月、花の各一字を一幅に物した三聯幅。一字を一詩と見る三章の詩。詩人は七絶の転句で天の奇瑞と驚ろかれたが、私は、詩書当然の作用と信ずる。その根拠は、左の毛詩序の一節を以て答える。曰く。「詩は志の之く所也、心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す、情、中に動きて言に形(あら)わる、之を言いて足らず、故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず、故に之を詠歌す、之を詠歌して足らず、手の舞い、足の踏むを知らざる也。情、声に発し、声、文を成す、之を音と謂う、治世の音は安くして以て樂しむ、其の政、和すればなり、乱世の音は怨みて以て怒る、其の政、乖(そむ)けばなり、亡国の音は哀しみ以て思う、其の民、困(しる)めばなり。故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きは莫(な)し」と。

竹雨先生も「雪月花王聯、想うに足れ樽盒近業中の傑作。宣(むべ)なり矣、天為めに奇瑞を降す。」と評されて私の判断を裏書きされた。

對鏡戲言

誰か言う明鏡人を欺かずと。

左衽左書また真を乱す。

百歳童心、二我無し。

何ぞ白髪をもつて青春に換う。

(眞韻 人、眞、春)

鏡はいつわらない、だから人間の手本として、亀鑑とか、殷鑒と遣われる、鑑はかんがみると読むが、かがみを見ると考えると一緒にした言葉であらう。それ程の鏡が、映ると着物が左前であったり、文字が左り字にうつっている。だいいち雀百までのことわざ通り昔も今も一つ心で一向に変わらぬ自分を曾ては紅顔に写し、今は白髪に写すのは、いったいどうしたことじゃと。諧謔の裏に一つの真理と、哀愁を含んでいる。

次司馬溫公閑居韻

庶民活計になやみ。

升斗日に営々。

政令生理に乖(そむ)き。

租庸怨声を煽る。

道心歳を追うて廢し。

陋俗時に及んで成る。

今若し匡濟せずんば。

騶虞那んど迎うるを得ん。

(庚韻 営、聲、成、迎)

国民は生活になやみ、その日暮しである。政治は生活原理にそむき、税金はうらみのまどである。されば道義は年とともにすたれ、悪習慣は日に日に増長しつつある。今若しこの趨勢を正さなければ、聖人の出現は勿論のこと、その至徳に感じて現われるという騶虞(靈獣の名)を迎えることなどは到底できることではない。との強い政治意見詩。

蘭亭序

大唐天子賺孤僧

大唐の天子孤僧をすかし。

禊序一篇空殉陵

禊序一篇空しく陵に殉ず。

聚訟難分書聖跡

聚訟わかし難し書聖の跡。

白雲深鎖碧峻嶒

白雲深く鎖す碧峻嶒。

（蒸韻 僧、陵、嶒）

大唐の天子は太宗、孤僧は智永禪師の弟子弁才、師から伝えられた蘭亭序の真跡を秘藏していた。太宗欲しくたまらないので提示を求めたが、弁才はあくまで所在を知らぬといってその命に応じない。そこで遂に肅翼の謀計を用いてだまし取ってしまった。そして熱愛の余り遺命を以て己れの墓に殉葬させ、昭陵の土と化せしめた。かくて羲之の傑作蘭亭序の真跡は惜しくも地上から消えてしまい、結局羲之の書の実相はかの白雲の深く鎖した山々を望むとひとしく、はつきりと知ることが出来なくなってしまった。

竹雨先生評して曰く「蘭紙の殉陵は千載の恨事。白雲の七字、敢えて説破せず、含蘊無窮の意あり」と。

注① 蘭紙（けんし）―蘭亭序の真跡は蠶蘭紙に鼠鬚筆を以て書いたと伝えられる。故に評言は蘭亭序を指して蘭紙といった。

注② 注② 白雲深鎖碧峻嶒―何という立派な余韻であらう。羲之の高真は仰ぐべし。実相は知り難しとの意を、出雲中の嵩山に比せられたのであろうか。

祝筆匠千湖齋華甲

想昔蒙恬創製時

想う昔蒙恬創製の時。

兔豪掃素墨淋漓

兔豪素を掃って墨淋漓。

功成不識身將老

功成って身の將に老いんとするを識らず。

鏤骨彫心筆一枝

鏤骨彫心筆一枝。

（支韻 時、漓、枝）

華甲翁千湖齋、老いをよそに、一本一本の筆に身命をかけて打込まれている姿は、忒千幾百年の昔、筆を初めて作ったという蒙恬の姿そのままのように想われる、と。翁の製作になる筆で雲煙を漂わせ、龍蛇を走らせつつ。

祝才力モトヤ創業四十五周年

迎來四十五周春

迎え来る四十五周春。

物換星移日日新

物換り星移つて日日新たなり。

一貫貞誠補文化

一貫貞誠文化を補す。

滿堂佳氣徳成隣

滿堂の佳氣徳隣を成す。

（眞韻 春、新、隣）

創業以来四十有五年、その間世相日日換り文物刻々新たである。これを買いて変らなかつたのは貞実、至誠以つて終始文化に貢献されたこと。まことに、徳を恃んで昌（さか）えられた今日のめでたさ。徳孤ならず、書海誌と結ぶ翰墨の縁。鄰睦年とともに驚く。

竹雨先生評して曰く、「二貫貞誠、徳自ら隣を成すゆえん、絶好の贈言と謂うべし」と。

黒木拜石兄七周忌辰

七年若逝いて後。

事ある毎にすなはち君を思う。

誰か継ぐ換驚の道。

昭和の王右軍。

（文韻君、軍）

幽明境を異にして七星霜、知己嚴として常在此不減、亦冥すべし。

竹雨先生評して曰く「結五字、其の書を品定すること、鼎呂も啻（ただ）ならず。他の一切の供養に勝ると万々なり」と。鼎呂とは重視することをいう。

梅天詩筵分韻得支

簾外無風雨似絲

簾外風無く雨絲に似たり。

飛花歷亂入園池

飛花歷乱園池に入る。

蝸涎題壁篆文怪

蝸涎壁に題して篆文怪しく。

新竹壓軒矛戟奇

新竹軒を壓して矛戟奇なり。

（支韻 絲、池、奇）

転結の妙対句、五月雨も亦樂し。

竹雨先生評して曰く、「奇、僻に墮せず、工、雅を傷（やぶ）らず」と。

六月雪開花即寄野方翁

飛花滿地白皚皚

飛花地に満ちて白皚々。

六月樗盒香雪堆

六月樗盒香雪堆し。

水漲園池恐流去

水園池に漲らば恐らく流れ去らん。

偷閑携筆來雨前

閑を偷み筆を携えて雨前に来れ。

（灰韻 皚、堆、來）

樗園に一本あり、嚴冬に緑を舒ぶ。主人由来を説く「昭和六年中華游歷の際西湖の畔より持ち帰りし蔦の傍にありし一実生の芽、自然に成長して二十数年を経過、丈余に成長し六月の頃初めて花咲けり。白色十字の小花にして芳香あり。薫風に落花すれば地上一面積雪の状を作す。樹の名を知らず、仮に六月雪と名づく」と。開花したら一見したき旨を依頼したのが正月。忘れるともなく半歳を経過した六月の或る日拝受した花信が此の詩である。

落花が散り鋪いて地面がまっ白になり、樗庵の苑が香しい雪景色になった。梅天なれば樹下の池水溢れて流れ去る恐れあり。時を惜しみ筆を換えて雨の降らぬ前に来れ」とある。腰に絵筆の矢立てを差しも敢えず駆けつけた樗園、起、承、我を欺かず。

題偽庵先生傳 並壽其華甲 翁別號千手庵

佛乎非佛又非神

仏か仏に非ず又神にも非ず。

自叙偽庵傳却眞

自ら偽庵を叙して伝却つて真なり。

華甲優游弄翰墨

華甲優游翰墨を弄す。

南無千手萬能人

南無千手万能の人。

（眞韻 神、眞、人）

仏かと思つたが、仏でもなければ又神でもない。千手庵、別に偽庵とも号し、自ら偽庵伝を述べたが、これは偽りでなく本当らしい。齡、杖郷を超へて、翰墨の趣味に余念がない。絵画、彫刻何でも出来ないものはない。真に千手万能の人ではある。

竹雨先生曰く「奇人伝に題す、其詩豈に奇ならざるを得んや、結七字画龍点睛」と。

鮎

金蛋銀鮎縁筠葉

金蛋銀鮎縁筠葉。

緇衣緋衲亦同牀

緇衣緋衲また同牀。

舌端珍重無雙味

舌端珍重す無双の味。

啜茗咬薑分外香

茗を啜り薑を咬んで外香を分つ。

（陽韻 牀、番）

金色の玉子焼、白銀のこはだ、縁の笹。海苔巻きまぐろ朱の飯台。舌の醍醐味咬み別けて、しようがにすする茶の香り。

漁翁 次柳宗元詩韻

日落沙禽何處宿

日落ちて沙禽何れの処にか宿る。

漁翁収去一竿竹

漁翁収めて去る一竿の竹。

餘照染山林外紅

余照山を染めて林外紅。

荻蘆蘸水洲邊綠

荻蘆水にひたして洲辺緑。

鐘聲幾杵月上遲

鐘声幾杵月上ること遅し。

白雲冉冉歸舟逐

白雲ぜんぜん帰舟逐う。

（屋韻 宿、竹、縁、蓬）

竹雨先生の評に俟つ。曰く「字なづみ句映じて、景を写すことはなはだ精なり。まことに是れ詩中画有る者、五、六風韻殊に佳なり。

と。詩、評、双壁をなし、贅筆加える余地なし。

訪尾上柴舟先生病

後園栽得竹千枝

後園栽し得たり竹千枝。

幽逕如氈苔蘚滋

幽逕氈の如く苔蘚滋し。

欲聽雙清風月夜

聴かんと欲す双清風月の夜。

鳳吟三十一言詩

鳳吟三十一言詩。

（支韻 枝、滋、詩）

柴舟先生は歌博士である。後園に干竿の竹を栽え、其間を縫う幽逕は苔むして毛氈のようだ。病早く癒えてここを逍遙せられるようになり、風月双清の夜、三十一文字の鳳吟を拝聴したいものである。

この作に対する柴舟先生の返歌が樗盒凝墨に載っている。曰く「秋まちてまたこむ君にふまるべく竹の小庭の苔よあつかれ」

潑散詩筵分韻得文

窮陰又伍鷺鷗群

窮陰又伍す鷺鷗の群。

意適心閑似白雲

意適心閑、白雲に似たり。

詩酒悠々別天地

詩酒悠々別天地。

只慚碌碌筆無勲

只慚ず碌々筆に勲無きを。

（文韻 群、雲、勲）

窮陰は年の暮れ。鷺鷗の群は詩友の会合。列子に「海上の人鷗を好み、母且（まいあさ）海上に之（ゆ）き、漚鳥に従つて遊ぶ。漚鳥の至る者百数、其の父曰く、取り来れ、吾れ之を玩ばん、と。明日海上に行く、漚鳥舞いて下らず。」とあり「機心萌せば即ち下らず。」と注された。この故事から、鷗鷺忘機とか、鷗盟とかの語が生じ、世外に超然たる風流とかその交わりを意味する。そこで白雲にも例える程の静かな気持で、友を鷗と見て、詩酒を楽しむ壺中の天。碌々筆に勲無きを慙ずる気持は機心か帰心か。生じるも道理、除夜である。

丁酉歲旦 昭和三十一年

神鷄鼓翼一聲長

神鷄翼を鼓して一声長し。

硯海新浮太古光

硯海新に浮ぶ太古の光。

願灑靈峰千載雪

願わくは靈峰千載の雪を灑いで。

欲書警世大文章

書せんと欲す警世の大文章。

（陽韻 長、光、章）

東天紅。齋戒沐浴、硯池に対すれば、得もいわれぬ墨色、深く沈んで太古の光がしのばれる。願はくは靈峰富士につもる千載の雪を硯池にそそいで墨をすり、絶唱の詩をものして世の迷蒙を醒ましたいものだ。

されば竹雨先生も「寄託浅からず、辞を吐いてはなはださかなり、一氣淋漓、樗翁老いず。」と評された。

丁酉元旦書懷

一意磨端硯 一意端硯を磨す。

無爲是佛心 無爲是れ仏心。

誰言朝露命 誰か言う朝露の命と。

永占去來今 永く占む去來今。

（侵韻 心、今）

ひたすらに磨る端溪の硯。ことさらなこともしない、思いもない、ひたすらに磨る端溪の硯。これぞ仏に通ずる心か。……仏は無常を説いた。漢書にも「人生朝露の如し」とある、いやいや、生命は無限である。この書を見よ、幾千年来の生命を伝え享け、更に幾千年の後に伝えるであらう……。

宸題燈

鳥迹滋々代結繩 鳥迹滋々として結繩に代える。

先人挑盡億千燈 先人がかげ尽くす億千の灯。

東方文化淵源遠 東方の文化、淵源遠し。

一穗熒然萬慮激 一穗熒然、万慮激む。

（蒸韻 繩、燈、激）

今を去る約五千年、伏羲氏の時、結繩に代えて、天地鳥獣の文を觀察して文字が出来た、と伝えられる。又それから三百年後、黄帝の時鳥の足跡を見て文字を作ったといわれる蒼頡。以後、幾千億の人が文字のために貢献して来た、文字は文化の光明である。遙かなるかな東洋文化の淵源、我も亦一灯を捧げんと勅題「ともしび」に寄せられた激慮。

臨池偶成

墨迹觀來品隲難 墨迹觀じ来って品隲難し。

甲論乙駁噪評壇 甲論乙駁評壇を噪がす。

名書豈止技工拙 名書豈に技の工拙に止まらんや。

人格性情毫底看 人格性情毫底に看る。

（寒韻 難、壇、看）

書の品定めは中々むづかしい。あの人がこういえば、この人が反対して評論中々さわがしい。が、徒らに小手先を評してうまいのまづいのもいい。書は心画なのだから、筆に伝わるその人の性情や人格をとり上げよ、と。

竹雨先生曰く「三、四、名言不磨、書を学ぶ人は、すべからく諸（これ）を紳に書すべき也」と。

諸（これ）とは第三句及第四句を指す。紳とは昔、上流の人が前に垂らした大帯、その帯に忘れぬようにこの転結の名言を書きつけて置くべしというのである。別言すれば、銘記して忘れるな、ということになる。論語に、子張は、「忠信を言い、篤敬を行ふ」と言う孔子の教えを紳に書いたとある。

過川奈

憶昔倉公拓地初 憶う昔倉公地を拓くの初。

荊榛幾度阻山輿 荊榛幾度か山輿を阻む。

如今萬頃球場緑 如今万頃球場緑。

玉閣玲瓏照太虚 玉閣玲瓏太虚を照らす。

（魚韻 初、輿、虚）

一眸万頃の緑、陽光燦々たる白壁。ここ川奈ゴルフ場である。憶えば二十数年前、大倉喜七郎大人に扈從して、踏査に来たときは、道はなし、いばらだらけのジャングル。吾々の乗つた山籠さえ進み兼ねたのであったがと、クラブハウスにコーヒーをすすって開拓の跡をしのばれた。

次流石翁古稀自述韻

繙來書萬卷 繙き来る書万卷。

腹笥豈云貧 腹笥豈に貧なりと云わんや。

筆健門多士 筆健にして門には多士。

古稀清福人 古稀清福の人。

（眞韻 貧、人）

七十年来味読して、腹の中にたたみ込んだ書物万卷、加えるに健筆で門下も多士濟々、貧乏どころか、古来稀なる清福の人よと、杖国の翁をたたえられた。

竹雨先生曰く「腹笥万卷、桃李門に満つ、雅人の清福、何物か之に如かんや」と。

桃李とは世に出した弟子を指す。唐書に「姚元崇等数十人、皆、狄仁傑の薦める所。或る人仁傑に謂て曰く、天下の桃李尽く公の門に在り矣と、仁傑曰く賢を薦めるは国の為めなり、私の為めに非る也」とあるに基づく。

聞鳳竹子病癒而還家

医戒を厳持して病魔を降す。

累年面壁感いかん。

禅心筆に入つて佳境を拓き。

奇趣人を驚かすことはより多からん。

（歌韻 魔、何、多）

二堅子が育の上膏の下に逃げこまない内に医戒をよく守つて病魔を放逐、達磨面壁さながらの苦行を積むこと幾年。その悟りはきつと筆端にもあらわれて、これからの君の書は定めて奇趣人を驚かすものがあるう。

祝翠軒翁受賞

昨夜禅牀夢美人

昨夜禅牀美人を夢む。

今朝乍遇藝園春

今朝たちまち遇ふ芸園の春。

斯翁一醉筆逾健

斯の翁一醉筆いよいよ健。

驅使龍蛇驚四隣

龍蛇を驅使して四隣を驚かさん。

（眞韻 人、春、隣）

楚辞で「美人」というのは、君子又は良友を指す。ここでも然り。ゆうべ見た君の夢は正夢、果して君が芸術院賞を受けられたとの今朝のニュース。今頃、祝酒五斗、焦遂を凌いで龍蛇を驅使し卓然四隣を驚かして居ろうと。見事院賞を射止めた額の辞句が「禅牀夢美人」の五字であった。

竹雨先生曰く「翠翁此の佳贈を獲、想見す。欣然破顔、更に一太白を挙げるを」と。

奉壽竹雨先生古稀

猗猗竹外下書幃

猗々たる竹外書幃を下す。

學德居然一世巍

学徳居然一世に巍し。

豈止文詩頌其壽

豈に文詩其寿を頌するに止まらんや。

高風清節古來稀

高風清節古來稀。

（微韻 韓、巍、稀）

猗々とは詩経衛風に「緑竹猗々」とあつて、美しく盛なる貌のことであり、又、竹雨先生の別号「猗廬」にかけられた句。その美しい竹を植えられた書窓に在つて、学徳一世に高い竹雨先生。芳翠先生も、竹の清風になびくが如くその詩文に傾倚され、瑯玕の如く潔朗なその節義をだだ嵩められた。古來稀な此の君の七十の攬揆の佳辰をたたえられたこの詩、竹雨先生御覧になつて、「君子の贈言、敢えて当たらずと雖も、深く其の盛意を領す」と受けられた。

竹雨先生の晩期に頒布された詩集「猗廬詩稿」の巻頭に松林桂月翁筆「猗廬索句図」が載せられ、その見返しに「竹窓灯火一臞仙。面目君に憑つて画裡に伝う。咲う我れ白頭猶お句を索め。三朝補する無く残年に到る。竹雨泰」としるされてある。竹のある書斎の窓。灯火、やせた翁。これは君の画に依つて伝うる私の姿である。白頭に到るまで詩韻を探り。明治、大正、昭和の三朝に何等貢献することなく年を取つてしまつたこと自嘲にたえない」という意に解せらるる。

緋包竹遺墨帖

未釋旅装緋帙遲

未だ旅装を釈かず帙を緋くこと遅し。

彪然巨冊照書帷

彪然たる巨冊、書帷を照らす。

遺翰一々沾胸臆

遺翰一々胸臆を沾おす。

彷彿當年把臂時

彷彿たり当年把臂の時。

（支韻 遲、帷、時）

旅行から帰着した途端、吉田家からの届け物、旅装束のまま忙手開包。大きな立派な書冊である。

さて亡友の遺筆、見て行く中に胸が一ぱいになった。臂を把つて相親しんだ当年の様子が次から次へとよみがえつて尽きるところをしらぬ。

竹雨先生曰く「事、真に、語、実に、中懷を写出し、一つとして浮泛の習無く、一つとして虚飾の病無し」と。

遊于本宮

新樹無風緑欲薰

新樹風無く緑薫ぜんと欲す。

北行百里遇鷺群

北行百里鷺群に遇う。

孱顔莞爾迎吾揖

孱顔莞尔として吾を迎えて揖す。

安達太郎山上雲

安達太郎山上の雲。

（文韻 薫、群、雲）

新緑百里、北に走って、雅友達に迎えられた。安達太郎山も、涌き立つ雲も、我を迎えて会釈する。

載筆來過北奥天

筆を載せて来り過ぐ北奥の天。

龍蟠鳳翥捲雲煙

龍蟠鳳翥雲煙を捲く。

姚黄魏紫争妍處

姚黄魏紫妍を争う處。

又與騷人結墨縁

又騷人と墨縁を結ぶ。

（先韻 天、煙、縁）

筆を携えここ陸奥に。紙に落せば煙か雲か、龍वादかまり鳳天かける。時は五月、花王の妍を争う鼻牡丹園にて花前に結ぶ翰墨の縁。

竹雨先生曰く「興に即して成る、風流蘊藉、吐囑自在なり、老手に推すべし」と。

富士山

乾坤凝正氣

乾坤正氣凝る。

秀美固無儔

秀美もとより儔い無し。

餘勢三千里

余勢三千里。

自成君子州

自ら成す君子州。

（尤韻 儔、州）

天地浩然の氣、凝って無比の秀峯となる。裾野に続く三千里、君子住（とど）まるべきの地なり、と。

孔子も論語公治長で「道行はれず、桴（いかだ）に乗って海に浮ばん」といい。又子罕に「子力夷に居らんと欲す。或ひと曰く陋之をいかんせんと。子曰く君子之れに居る。句の陋かこれ有らん」としるされてある。

この意味は、中華では最早や道が行われないから、東方海上の外国（日本）に渡ろうと孔子がいわれた。或る人が「そこは未開国でお困りでしょう」というと孔子は「すでに、君子の住んで居る国だから、未開ではない筈だ」といわれたのだ。自成君子州の根拠は実に論語以前にある。

車中望嶽

車窓浮び出だす嶽芙蓉。

歴々たる孱顔一望の中。
疑い見る飛龍雲を捲いて起るか。
千秋の積雪天風に散ず。

（東韻 蓉、中、風）

東海道線、期待した通りくつきりと車窓に現れた富士山。思わず目を見はる。中腹にかけて、雲か、非ず、龍か。古老曰く、「あれは、突風が起つて雪を吹きとばしているのですよ」と。
竹雨先生曰く「奇景の活現、筆亦風雲離合、端倪すべからざるの妙有り」と。

刊行書海四百號所感

書海傳燈四百篇

書海ともしびを伝う四百篇。

臨池正法紹前賢

臨池の正法前賢を紹ぐ。

求真探奥吾將老

真を求め奥を探つて吾れ將に老いんとす。

百萬人參文字禪

二百万の人は参ず文字禪。

（先韻 篇、賢、禪）

書海誌發刊以来綿々四百号。ひたすらに書の本道をたどり、先賢の遺業をついで来た。神髓を求め、奥義をきわめつつ……。而して書海誌参加者毎号五千、四百号を以て二百万人。一エポックを作して感無量。

されば竹雨先生感応して曰く「近時書道の盛んなること、前古未だ見ざる所、涵泳の功、鼓吹の力、以て証すべきなり」と。この涵泳、鼓吹という言葉は、書海に身をひたして、共一泳ぎつつ、励ましつとと解せられ、巻尾を飾るにふさわしい名句となった。

筆を措くに当つて痛切に思うことは、芳翠先生の詩たる、語るが如く、目に耳に、爽かである。何の掃帚録ぞ、却つて隔靴搔痒の憾を副えた罪浅からず、深く慙愧の意を表する。

芳翠先生端愈々壮にして、本集以後の玉吟瑤泳無尽蔵である。続集、続々集の刊行を翹望すること慈雨を待つ草木の心である。

▽附劫嶮詩存掃帚録後△

孤盲撫象一年間

全豹揣知如九山

自省濫竿慚掃帚

鞠躬閣筆伏汗顏

庚子五月念七劫餘詩存拜領このかた

日夜朝暮に読誦する

およそ一年

中頃思いたつて筆をとる

撫でてはしるし誌してはなで

象尾に附して亦歩亦趨

三百四十九由旬を征く思い

幾山河 大きさ 広さ

柄にもないと自責のおもい胸に抱いて

掃帚録とはいえ やはり慙かしい

併し完った

筆を納めて

冷汗の流るる顔を

師に向け 読者諸賢にむけて

稽 首 頂 礼 三 浦 勇 次

一九六一年三月 野方有風艸舎において